

# 学内広報

for communication across the UT



総合研究博物館「理学部動物学教室旧蔵ガラス乾板デジタルアーカイヴ」より

特集：「What's going on? 行動シナリオ」拡大版  
タフな東大生とは？

2010.1.25

No. 1395

特

# タフな東大生とは？



集

あけましておめでとうございます。新年第一弾の特集は「タフな東大生」特集です。12月に行われた総長講演会の内容をお送りするとともに、行動シナリオにおける「タフな東大生」育成の具体策についてご紹介いたします。



## 総長講演会 ダイジェスト

### タフな東大生 とは？

2009年12月1日  
理学部1号館・小柴ホールにて  
主催：学生相談ネットワーク本部

今年4月、私は入学式の式辞で「タフな東大生になってほしい」というお話をしました。激動の時代を迎えた現在、東京大学は学術の力を最大限に生かして時代の課題に取り組まねばならない。そのためには、本学の知的活動を担う主体のひとりとして、タフな東大生に成長してほしい。そんな式辞を述べました。知識だけでなく「社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさ」を身につけてほしいという意味で「タフな」という言葉を使ったのですが、そのようなタフさの基盤にあるのはコミュニケーションのスキルではなく、人間的な力、人格そのものだと思っています。東京大学の運営には、東大生個人のためだけでなく、将来、その能力を社会で十分に発揮してもらうという意味で、税金が投入されています。ですから、個人的、および社会的という2つの意味で「知識をフルに生かすことができるタフさ」を持ってもらいたいと思い、そのような式辞を

述べたわけです。

「タフな東大生とは」。それが今日のテーマです。私の専門の法律分野では「手続き的な法」と「実体的な法」というように法律を区別して、セットで論じることがよくあります。そこで、「タフさ」というものを、手続き的な面から考えてみると「タフさはどのようにして育つか」というテーマが浮かび上がってきます。実体的な面から考えてみると「タフさとは何か」というテーマが浮かび上がってきます。今日はこの2つの視点からお話したいと思います。

#### タフさは多様性の中で鍛えられていく

タフさはどのように育つのか。

入学式の式辞でも申し上げましたが、タフさは「多様性」の中で鍛えられて育っていくものです。異なった考え方や立場、異なった人生

12月1日、小柴ホールにて学生相談ネットワーク本部の主催により、「総長講演会『タフな東大生』とは」が行われた。会場には学生、院生、教職員を含めて約200名が詰めかけた。

亀口憲治特任教授(学生相談ネットワーク本部企画室長)の司会で18時30分より講演会はスタートした。まず、古田元夫教授(学生相談ネットワーク本部長)より開会の挨拶があった。次に濱田純一総長より「タフさ、多様さ」という表題で、「タフな東大生」を育成する課題の今日的意義についての基調講演があった。これをうけて、小島憲道理事(副学長)、尾嶋正治教授(大学院工学系研究科・工学部)、恒吉僚子教授(大学院教育学

研究科・教育学部)、倉光修教授(学生相談ネットワーク本部学生相談所長)、佐々木司教授(学生相談ネットワーク本部精神保健支援室長)をパネリストに迎え、その具体策についてパネルディスカッションを行った。

尾嶋教授は、多様なタフさについて具体例を交えて述べていた。恒吉教授は、東大生の「考える力」の潜在性を取り上げ、学生に対し、よりタフな東大生へ成長して欲しいとの期待の言葉を投げかけていた。小島理事(副学長)からは、タフになるためには、単一の価値観からいかに脱却し、多様な価値観に出会うかが重要であるとの発言があった。倉光教授は、勝利以外の価値を認め、

ときにはゆっくり休むことが必要であると、柔軟なタフさについて述べていた。佐々木教授からは、個々の能力・体力においては弱さも多様性として認めあうことも、また、タフさであるとの発言があった。

パネルディスカッションの後、学生、院生からの発言に対し、濱田総長や教員陣が直接回答する質疑応答の時間に移った。学生からはどういったらタフになれるのか、東大生の弱みとは何かなど様々な質問や意見があがった。「タフな東大生像」について、教職員、学生、院生が直接話し合う場を設けた本講演会は、おおいに盛り上がりみせ、「タフな東大生像」をそれぞれの心に映しながら、閉会となった。

タフになるために心がけることは？

まずは体力、健康維持。

佐々木

くじけてもいい。  
泣いてもいい。  
友達に相談すればいい。  
多様性は  
難しい。  
それを認知すること。

尾嶋

倉光



観、異なった言語や生活習慣、そういうものを持つ他者との緊張の中で、人は鍛えられ、タフになっていきます。現実の世界というものは、入り込めば入り込むほど多様性にあふれていますし、緊張に満ちています。グローバル化が進行していくであろう、これからの時代にはますますそうなります。特に東大生の皆さんは「グローバル化した世界で、知識を力として、リーダー的役割を担ってほしい」と期待されることが多いわけですから、タフさについてしっかり考えてほしいと思っています。

皆さんは受験勉強をやって大学に入ってきました。それはとても苦しい経験で、ある意味では、受験勉強を通じてタフさを身につけてきたと言えるでしょう。しかし、それは「見通しのきく苦しさ」だと思います。東大合格は確かに高い目標ですが、どの科目の内容をどの水準まで勉強すれば良いか、かなり明確ですし、勉強法も大体、はっきりしています。つまり、

「それが出来るか出来ないか」だけの話だろうと思うのです。それと比べて、大学生になると、やがて「学問の新しい世界を自分の手で切り開いていこう」という時期がやってきます。見通しのきかないところに踏み込んでいく苦しさが出てくるのです。さらに一般的に言うならば、見通しの悪さ、不安定さは人間社会が持っている特色だろうと思います。社会において、しっかり生きていこうとするならば、見通しの悪さに取り組む力を持たなければなりません。こうした「見通しの悪さに対応できるタフさ」を身につけていくには、学生時代に、多様な価値観や考え方、多様な生活習慣や言葉などに触れておくことが必要です。知識をベースに多様性と向き合うということですね。理屈ではなく、とにかく経験を積むこと。それが大切だと思います。

考えてみれば、学問をやることは世界の多様性や異質性をバーチャルに体験すること

でもあります。ですから、学問をやることは「タフになるための基本である」と思います。

今、「対応できる」という言い方をしましたが、これは「賢く対応する」あるいは「自分が傷つかなないように対応する」ということではありません。リスクを十分に考えながら、それでも大胆に行動していくという意味を「対応できる」という言葉に含めるべきだと私は思っています。それが「対応できる力」です。

私自身の経験を振り返ってみると……高校生の頃、なくなりかけていた蒸気機関車の追っかけをやって日本各地を旅したことがあります。蒸気機関車は田舎に行かなければ見られません。1日に数本しか列車がやっこない小さな駅で寝泊まりしたりしました。その時に話す機会のあったいろいろな人の多様な知識・考え方や生活を見て「初めて社会を知った」と感じた記憶があります。これは私の原体験のように思え、受験時代にそのよう



東大生の弱みは何？

最適値を見つける能力が  
高いこと。  
どろくさいほうが  
最後は成功するんです。

尾嶋



よりタフになるには？

## 遊び心

が出てくると、



タフにつながってくる。

倉光

東大生のタフさとは  
なんですか？



考える力を秘めていること  
とです。大学という場所は  
オリジナリティを求めめる  
場であつて、高校までに試  
験で求められた能力とは  
異なるということ伝え  
ると、彼らは見違えるよ  
うに変わっていくんです。  
はじめのセットアップのと  
ころを助けるだけで彼ら  
は自分でステップ・ジャン  
プできるんですよ。

恒吉

な行動を許してくれた親に感謝しています。今でも、あの経験は私の「財産」だと思っています。

このように、私は「様々なものに接する機会を持つこと」がタフさを育てていく基本的な枠組みになるであろうと考えています。

### タフさとは実に多様なものである

もうひとつ、実体的な面から見た「タフさとは何か」という問題がありますね。入学式の式辞の中でもお話しているように、タフさとは「社会的なコミュニケーションの場におけるたくましさ」、「差異を超えて知識を受け取ることができる力」、「互いに論じ合うことができる力」といったものだとは私には考えているのですが、ここでは特に「コミュニケーション」という言葉を使った意味についてお話ししておきたいと思います。

コミュニケーションとは「双方向の、情報や考え方のやりとり」ですが、双方向である以上は「相手に対する理解、思いやり、配慮」が含まれると思っています。一方的に自分の考え方を押し通そうとするのではコミュニケーションにはなりません。相手の立場をどう考えるかということがタフさの要素になると思います。

それから、コミュニケーションの場では、必ずしも、相手の意見と自分の意見が重なるとは限りません。考え方や経験の違いによって、コミュニケーションがうまくいかないこともあるわけです。そういう時は「自分がリスクを引き受けることによってコミュニケーションの限界を乗り越える」ということが必要になります。「本当にこれが正しいのだ」と確信したならば、リスクを引き受けてでもコミュニケーションの限界を乗り越えていくタフさが必要な場合もあるのです。

さきほどからタフさの説明をしていますが、

これらは「理念型としてのタフさ」です。現実の人間社会というものは実に多様です。ひとつのタフさのモデルで、すべての問題が解決するわけではありません。同時に、皆さんひとりひとりの「人間としての持ち味」も、まことに多様です。つまり、人間の現実、皆さんの個性に応じて、タフさも多様なものなのです。ですから、私は、「理念型的なタフさ」をすべての人に求めることは無茶だと思っています。タフさとは自分の主張を強引に押し通すことだけではない。「自分の耳に痛いこともしっかり聞く」というタフさもあります。「本をしっかり読む」、「実験にじっくりと取り組んでいく」というタフさもあります。「失敗にへこたれない」、「自分の弱さとして向き合う」というタフさもあります。そう考えると、「自分に対する厳しさ」はタフさの重要な要素です。

いずれにせよ、こうした様々な意味合いの根底にある「コミュニケーション」というものを



先生の持っているタフさとはなんですか。

「転んでもタダじゃおきない」ということ。

アキレス腱を切ってしまった時、足の回復速度が物理化学のある公式にあてはまるか実験しておおいに楽しみました。怪我を科学してみたんです。

尾嶋



つらいとき、  
悩みがあるときは  
どうすればいい？



悩みがあるときは  
「寝てしまう」のが  
一番です(笑)。  
もうひとつはお酒を  
飲まないことですね。

佐々木

周りに合わせるだけじゃ  
どこかむなし。  
「空気しか読めない人」にも  
それなりのつらさがある。  
自分のビジョンを育むこと  
それも  
コミュニケーション。  
倉光

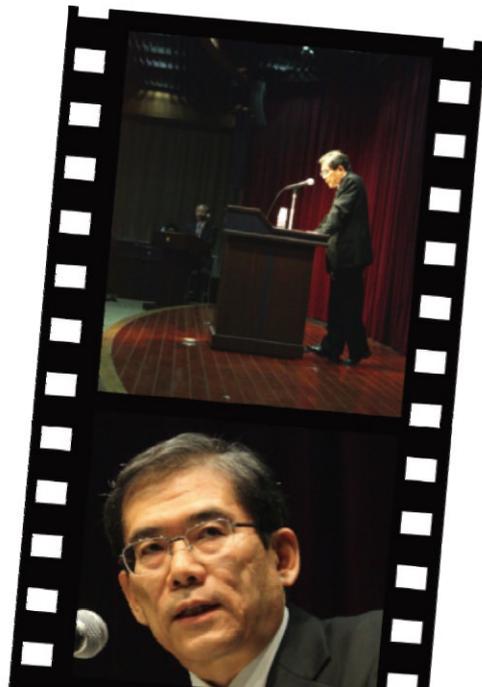
就活がうまくいきません。  
コミュニケーションに自信がなくなりました。

「大好きです」という熱い気持ちを、  
わかるように伝えること。  
男性が女性を口説くときと同じで、  
相手に伝わらないと意味がないんです。

尾嶋

コミュニケーション能力がないから  
ダメということではない。  
能力も体力も多様さがある。  
それをお互い補い合うことが重要なのである。

佐々木



大切にしてほしいと思います。自分の強さを  
伸ばしていく際にも自分の弱さと向き合う際にも  
「他者との関係」が必要になります。自分の  
強さを伸ばす時、他者に対する理解や思いや  
りを持つ。自分の弱さに向き合う時、ひとりだ  
けでは考えない……皆さんにタフさを期待す  
るときの私の提言です。

### 社会の現実を垣間見、 真剣に考える

最後にひとつ、皆さんに課題を出しておきたい  
と思います。現在、来年度の予算編成を決  
めるための行政刷新会議が行われています。  
そして、国立大学の研究費や教育費が削減さ  
れるという危惧が広まっています。それに対  
して、ノーベル賞受賞者の皆さんや、私も含  
めて様々な大学の学長が反対声明を出したり  
しているわけですが、私はこの問題を学生の

皆さんにもしっかり考えていただきたいのです。  
(編集部注：2009年12月1日現在の状況)  
大学予算の削減が皆さんの教育環境、学生  
支援環境に直接影響を及ぼすことがあるかも  
しれないからです。このテーマはどのように解  
決していけば良いか、なかなか難しいところ  
があります。一方では、我が国に財源がもう  
ないという状況がありますし、もう一方では、  
大学予算の削減が科学技術などの学術の可  
能性を狭め、我が国の将来に対して悪影響を  
及ぼす恐れがあるという状況があります。そ  
んな中で、どのようにバランスをとっていけ  
ば良いのか。大変見通しのつきにくい問題  
です。おそらく政府自体も悩んでいるのだら  
うと思います。

社会には、すぐに正解の見えない問題がた  
くさんあります。しかも、そのような難問は  
今後ますます身近な問題となってきます。今  
回の問題は、社会の現実を垣間見、それにつ

て真剣に考えることによって、皆さんのタフ  
さを磨く良い機会だと私は思います。

今日はいろいろな話をしてきましたが、要す  
るに私は「タフさは多様さの中で育ち、そし  
てまた、タフさは多様なものである」と言  
いたかったわけです。もちろん、私自身、  
タフさについて十分に考え抜いているとは  
言えませんので、今後は皆さんとの議論  
の中でさらに認識を詰めていきたいと思  
っています。どうもありがとうございました。

Be tough!

### 小島理事(副学長)談話—タフさと多様性—



あるとき、生協で偶然、学生同士のこんな会話を  
耳にしたんです。「理3に入った誰々君は、俺た  
ちのこと見下すんだぜ」。これは衝撃的でした。  
会話の話し手は、おそらく本学の理1、理2の学  
生だったんだろうと思います。中高一貫の進学  
学校のなかで、偏差値という単一の価値観をも  
っていた学生たちは、このように、人生の価値  
観自体も「偏差値」が基準になっているように感  
じられました。私は、大学に入ってもなお、彼ら  
がそれに縛られているという事実にはひどく衝  
撃を受けたんです。

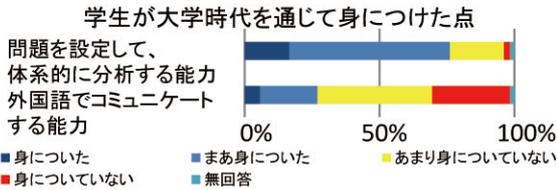
ひとは多様な価値観に出会うことではじめて、  
偏差値のような単一の価値観から自然な形で解  
き放たれて回復し、「タフさ」を得ていくの  
ではないでしょうか。また、ある特定の価値  
観を肩に重い荷物として背負った学生は、そ  
の単一さから病んでいくこともあるのだら  
うと思います。そういったこともふまえると、  
タフな学生になるためには、単一の価値観  
からいかに脱却して、多様な価値観に出会  
うか、それが重要なのではないのでしょうか。



Designed by  
Chizuko Totsuki

# 「行動シナリオ」における「タフな東大生」

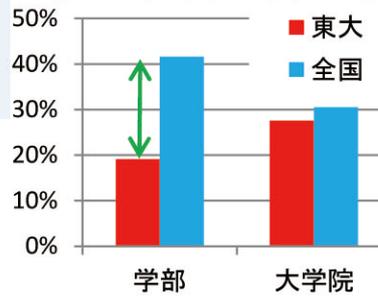
前ページまで様々な「タフさ」が語られてきましたが、実際のところ、東大生の現状はどうなっているのでしょうか。「行動シナリオ」の議論で参考になっているデータをご紹介します。



学生が大学時代にどのような力を身につけたか調査すると、分析力は「身につけた」とする比率が大きい一方、外国語能力については「身につけていない」とする比率が大きくなっています。学部前期課程で身につけた能力を聞く別の調査でも、3分の2以上が「論理的・分析的に考える力」が（ある程度）身につけたとする一方、「他者と討論する力」は8割近くが（あまり）身につけなかったと回答しています。

出典：学部新卒者に対する「大学教育の達成度調査アンケート」(H21.3実施)  
教養教育の達成度についての調査(H21.3実施)

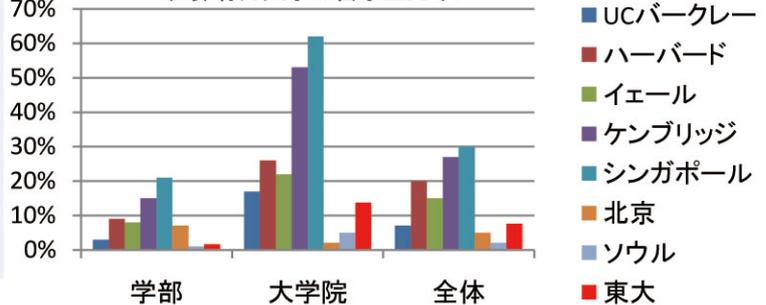
東大と日本全国の女子学生比率



女子学生比率について見ると、全国平均と比べ、特に学部段階で女子学生比率が低いことがわかります。また、世界の有力大学と比較すると、留学生比率で大きく水をあけられているのが現状です。

出典：「東京大学の概要」(平成21年度版)、平成20年度学校基本調査、「世界の有力大学の国際化の動向」(東京大学国際連携本部調査報告2007年11月)

世界有力大学の留学生比率



上記のような状況を前提に、「行動シナリオ」で重点的に取り組むテーマの一つとして『「タフな東大生」の育成』を掲げることにしています。ここでは、次のような内容などを達成目標と設定しています。

- ・全ての学生が、豊かな教養と深い専門性を備えた人材になるようにする。特に、海外体験・異文化体験を通じ、コミュニケーション能力や行動力を身につけさせる。
- ・多様な学生構成の実現により、相互に切磋琢磨する教育環境をつくる。【例：2020年までに女性比率30%、留学生比率15%の達成を目指す。】

これらの目標を達成するために、たとえば右のような具体策を検討していきます。

- レイト・スペシャリゼーションの実質化と教育システムの改善
  - ・海外への短期留学の飛躍的拡大に向けた条件整備
- 多様な学生の受入れと交流の促進
  - ・国内外の高校生等に対する積極的広報（特に女性志願者増に向けた取組の強化）
  - ・入学者受入れの方針の明確化と入試改善の検討（高等学校段階の学習の多様な評価の在り方の研究など）
  - ・留学生との交流により、異文化理解と切磋琢磨ができる仕組みの構築・展開
- 学生支援の充実
  - ・奨学金を含む、きめ細かな経済的支援の推進
  - ・希望者が入居できる学生寮等の整備

## 「行動シナリオ」学内意見公募を実施しています（～2/10）

1月20日より、東大ポータル上で「行動シナリオ」の学内意見公募を開始しました。執行部として具体的な内容を決定している事柄だけでなく、学内構成員のみならず、さらに考えていくべき検討事項も含まれています。2月10日までの期間中、みなさまから多くのご意見をお寄せいただけますよう、よろしく願いいたします。

今回意見公募の対象としたのは、「行動ビジョン」と「重点テーマ別行動シナリオ」です。「行動ビジョン」は、具体的な行動の背景にある基本スタンス、「東京大学憲章」の精神と具体的な「行動」を架橋する考え方を示したものです。「重点テーマ別行動シナリオ」は、右の9つのテーマに即して、本ページ中段のように、数値目標を含む達成目標、主要な取組を掲げています。以下のページで内容をご確認いただき、ぜひご意見をお寄せください。

1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求
2. グローバル・キャンパスの形成
3. 社会連携の展開と挑戦
  - 「知の還元」から「知の共創」へ
4. 「タフな東大生」の育成
5. 教員の教育力の向上、活力の維持
6. プロフェッショナルとしての職員の養成
7. 卒業生との緊密なネットワークの形成
8. 経営の機能性向上と基盤強化
9. ガバナンス、コンプライアンスの強化

意見公募のページはこちらから <http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/> (東大ポータル) お寄せいただくご意見はこちらまで(様式自由) [k-scenario@adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:k-scenario@adm.u-tokyo.ac.jp)

連絡先：【p2～4】本部広報グループ(内線22031)、【p5】本部企画グループ(内線22393)

# NEWS

## 一般ニュース

本部国際企画グループ、高齢社会総合研究機構  
「日本・スウェーデン国際会議—ジェ  
ロントロジー—」を開催

一般

世界最長寿国である日本と高齢社会先進国であるスウェーデンの有識者によるシンポジウム「ジェロントロジー：安心して老いを迎えられる超高齢社会をめざして」が10月7日（水）に安田講堂において開催された。濱田純一総長、アンデシュ・ハルベリ ウプサラ大学総長、ステファン・ノレーン在日スウェーデン大使による挨拶の後、小宮山宏総長顧問、ペイエ・エミルソン クレアブ最高経営責任者による基調講演が行われた。続いて7名の有識者によるパネルディスカッションが行われ、約900名の参加者が熱心に聴講した。



安田講堂におけるシンポジウム

また、シンポジウムと並行して、工学部2号館フォーラムにて国内外の企業等による展示会が開催された。様々な業種の企業が参加し、高齢消費者のニーズに合わ

せた商品開発、高齢者の生活を豊かにする技術やサービスの紹介などが行われ、東京大学からも高齢社会の課題に取り組んでいる2つの研究組織が活動内容や研究成果について報告した。



企業、大学他研究機関による展示会

10月8日（木）、9日（金）の2日間は、(1) 政策と医療福祉サービス、(2) 医学臨床研究と教育、(3) 高齢社会を支える科学技術、の3つの専門分野に分かれてワークショップが開催された。8日（木）は台風が直撃したにもかかわらず、日本とスウェーデンの研究者がそれぞれの研究成果を報告し、活発な意見交換が行われた。9日（金）は前日のワークショップの内容を踏まえ、今後日本とスウェーデンが協力して取り組むべき研究テーマ、共同研究の実行可能性について議論された。

最後に、今回参加したウプサラ大学総長から、次回は2年後にスウェーデンのウプサラにて開催したいとのコメントがあった。



10月8日に開催されたワークショップ

## 本部外部資金戦略グループ



### 平成 21 年度科学研究費補助金第 1 段 審査委員表彰を受賞！

日本学術振興会は科学研究費補助金の配分審査に関し、昨年度より模範となる審査意見を付した審査委員への表彰を行っており、10月29日（木）に平成21年度の表彰者一覧を発表した。

今年度は、約3,300名の第1段審査委員の中より20名の審査員が選考され、本学からは鈴木讓教授（農学生命科学研究科）、渡邊すみ子特任教授（医科学研究所）の2名が表彰された。

科学研究費補助金の配分審査は専門的見地から2段階で行われており、第1段書面審査はすべての審査の基盤となるもので、これらの模範となる審査意見はその後の科学研究費補助金制度の適正・公正な運営にとって重要な役割を果たしている。

本学での表彰式は、11月26日（木）、松本洋一郎理事（副学長）室において執り行われ、表彰状と記念品が松本理事（副学長）より受賞者に手渡された。受賞後は審査委員としての心構えや審査時の苦勞などについて、和やかな懇談が行われた。

なお、表彰された審査委員の氏名等については、日本学術振興会のホームページにて公表されている。

<http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/>

## 本部学生支援グループ



### 第 56 回総長杯争奪水上運動会が開催される

恒例の運動会行事「総長杯争奪水上運動会」が、11月28日（土）に埼玉県戸田オリンピックボートコースで開催された。本大会は本学関係者によるボートレース大会で、競技経験に関わりなく楽しめる総長杯のスポーツイベントとして、またボートレースを体験する数少ない機会として例年好評を博している。今年度は小島憲道理事（副学長）を初め、学生や教職員ら総勢164名が参加し、天候にも恵まれ盛会となった。

メインレースは「ナックルフォア」と呼ばれる4人漕ぎの艇を用い、250mレース2回の合計タイムを競うものである。艇に乗る「クルー」は、参加者が4人1チームで漕ぎ手となり、各チームに漕艇部員がコックス（舵取り）として加わって、大会を通じて丁寧に指導することになっている。競技に使用するボートは公園ボートと違い、脚を主体に体全体を使って漕ぐもので、多くの参加者にとっては経験のない動きではあったが、どの艇もすぐに上達し、4人が一丸となった迫力あるレース展開を見せた。

メインレース【レガッタの部】のほか、陸上では【エルゴメーター】というボートのトレーニングマシンを用いたチームリレーが行われ、会場は始終歓声が絶えなかった。昼食時に振舞われた豚汁も好評で、またレース後には会場の東京大学戸田橋艇庫にて懇親会が開かれ、普段はあまり関わらない学生や教職員同士が親睦を深め合うことができた。

本大会の結果は次ページの通りである。



レースの様子



レースの様子



エルゴメーターで進行距離を測定

【レガッタの部】 < 東京大学総長杯 >

順位	チーム名	合計タイム	修正	換算タイム
1	きのこオムレット	2分 53.54 秒	-6	2分 47.54 秒
2	帰ってきた ラブリー ミホちゃん♡	2分 48.33 秒	3	2分 51.33 秒
3	インチキ筆頭チーム	3分 12.37 秒	-15	2分 57.37 秒
4	チーム伊藤	3分 11.22 秒	-12	2分 59.22 秒
5	CR 国際	2分 59.39 秒	0	2分 59.39 秒
6	珍獣混在チーム	3分 7.49 秒	-6	3分 1.49 秒

※ 250 m のタイムトライアル 2 回の合計  
 ※ 順位決定の際、経験者は一人につき + 12 秒、女性は一人につき - 6 秒、50 歳以上は一人につき - 3 秒で計算されます

【エルゴメーターの部】

順位	チーム名	タイム
1	インチキ筆頭チーム	1分 59.80 秒
2	帰ってきた ラブリー ミホちゃん♡	2分 37.60 秒
3	珍獣混在チーム	2分 43.20 秒
4	チーム角田	2分 48.00 秒
5	紺ちゃん's	2分 49.70 秒

※ 4 人チームで男子 200 m、女子 150 m のチームリレー。経験者は + 10 秒、50 歳以上は一人 - 3 秒で計算されます

【エルゴ 30 秒漕の部】

順位	名前	距離
1	藤井 翔	167M
2	Jomas Jolichte	162M
3	小田 圭介	161M

※ 30 秒間の進行距離を競います（自由参加）経験者は - 15 M、女子 + 20 M、50 歳以上 + 3 M で計算されます

本部留学生支援グループ

平成 21 年度第 2 回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される



教職員ならびに卒業生の方々からの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成 21 年度第 2 回奨学生（奨学金月額 5 万円 / 支給期間：平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月）として 10 名の留学生を採用し、11 月 30 日（月）に奨学生証書授与式を開催した。

式は、田中明彦理事（副学長）（留学生支援基金運営

委員会委員長）、小島憲道理事（副学長）（同委員会副委員長）及び坂野仁留学生センター長（同委員会副委員長）の臨席の下、田中理事（副学長）から奨学生に証書が授与され、「本奨学金は教職員、卒業生の方々からの寄附金から支給されるものである。優秀な留学生の皆さんには、研究・勉学の成果を大いに期待している」との挨拶があった後、奨学生を代表して大学院法学政治学研究科の大学院外国人研究生の袁田さん（中国）から、「母国で国際取引の仕事に就いていましたが、国際貿易に関する法律の専門的知識を得て、将来の仕事に生かすという夢をかなえるため、東京大学に留学しました。留学生活では経済的な厳しさを始め、常にさまざまな問題に直面していますが、この奨学金のお陰で学業に専念することができるようになります。皆さんの期待に応えることができるよう頑張りたい」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で 300 名となった。ここに本基金の趣旨にご賛同いただいている皆様のご支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



田中理事（副学長）から奨学生証書を授与される袁田さん



東京大学外国人留学生支援基金平成21年度第2回奨学生一同

## 本部学務グループ

### 平成 21 年度教育実習・介護等体験懇談会開かれる

一般

12月3日(木)17時30分から山上会館において、平成21年度東京大学教育実習・介護等体験懇談会が、教育運営委員会教職課程部会主催で、大学院教育学研究科・教育学部が取りまとめ部局になり開催された。

この懇談会は、教員免許状取得のために必要な教育実習・介護等体験でお世話になった実習校、社会福祉施設・特別支援学校等の関係者と本学の学生・教職員が懇談する催しであり、平成16年以來の開催であった。

大学側からは、濱田純一総長をはじめ学部長、教職課程委員会委員、教育学部附属中等教育学校教諭を含む本学教職員50名、学生21名、教育実習校・特別支援学校、東京都学士倶楽部の先生方15名が参加した。

懇談会は、濱田総長の挨拶に始まり、武藤芳照教育学研究科長のお礼と今後の協力依頼の挨拶、南風原朝和教育学部附属中等教育学校長の教育実習経過報告に続き、佐藤慎一理事(副学長)の教育実習経験談、乾杯の発声により始まった。

しばらくの懇談後、理学部及び薬学系研究科博士課程学生2名から教育実習を終えての感想等報告があり、教育実習校を代表して森安信行教諭(岡山白稜中学校・高等学校国語科担当)から教育実習についてのご感想、ご意見及びご助言をいただいた。

また、教育学部及び人文社会系研究科博士課程の介護等体験者2名から、体験談等の報告が行われ、続いて武井喜行 社会福祉法人あだちの里サービス管理責任者から、介護等体験についてのご感想、ご意見及びご助言をいただいた。

会は、終始なごやかな雰囲気で行われ、最後に、最も多くの学生が教育実習・介護等体験に参加している大学院人文社会系研究科・文学部の小松久男研究科長からの挨拶をもって、19時30分頃盛況のうちに懇談会は閉会した。



懇談するサレジオ学院浜田明日教諭、中野特別支援学校矢野勝義副校長、濱田総長、武藤教育学研究科長(左から)



教育実習参加体験報告を行う理学部の麻生尚史君



挨拶する岡山白稜中学校・高等学校 森安信行(左)、社会福祉法人あだちの里 武井サービス管理責任者(右)

## 海洋アライアンス

### 第2回海洋アライアンス・日本財団共同シンポジウム開催

一般

12月11日(金)、海洋アライアンスと日本財団は共同シンポジウム「食卓に迫る危機一次世代に海を引き継ぐために一」を開催した。全3回シリーズの2回目になる今回は、私たちの身近な魚であるマグロとウナギにスポットをあて、生産・流通・管理の問題を取り上げた。

最初に生産と流通の現場からそれぞれ大岡宗弘氏(日本養鰻漁業協同組合連合会会長)と林弘二氏(双日・水産担当)に登場していただいた。大岡氏は、日本におけるウナギ養殖の現状や中国などからの輸入品による影響、ヨーロッパウナギの貿易規制による影響などについて解説し、自身が行っている親ウナギの放流活動も紹介した。林氏はマグロの国際取引の状況や、地中海でのマグロ生産現場の現状を踏まえた上で、国際的なマグロ漁業規制の強化が引き起こす問題を提起した。

続く石塚吉生氏(水産総合研究センター理事)、金子与止男氏(岩手県立大学総合政策学部教授)、黒倉壽氏(本学農学生命科学研究科教授)らの講演では、管理と今後の対応に話題が移った。石塚氏はマグロ資源やウナギ資源の悪化や養殖の難しさと漁業管理の在り方を分析し、金子氏は水産物がワシントン条約の規制対象になった場

合の影響を、制度的な視点だけでなく家庭レベルの視点からも考察した。最後に登壇した黒倉氏は日本における漁業の歴史や文化に言及しつつ、資源崩壊の危険性が正しく消費者に伝わらない状況を発表した。

一通りの講演が終わると、講演者6名に奥脇直也氏(本学法学政治学研究科教授)を加えた総合討論を行った。ワシントン条約と漁獲規制 (ICCAT) の両方で規制する必要があるのか、さらに食卓に危機が迫る中、政府・生産者・消費者はどう行動するべきか、幅広い内容が論じられた。

最後に海洋アライアンス機構長の浦環氏がマイクを握り「色々な分野で透明性が欠如しており、一般の人が知らないことが多い。このシンポジウムを通じて正しい知識を広め、若者にサステナブルな海を残していきたい」と締めくくった。

会場からは「漁業にはコストがかかり改善に向けて様々な取り組みがなされていることがわかった」「水産業を考える良い機会となった」といった感想が寄せられた。また講演についての意見も多く寄せられ、当シンポジウムに対する関心が高いことを示した。



総合討論の様子

最終回となる第3回のシンポジウムは3月12日(金)に開催されます。詳しくは海洋アライアンスホームページをご覧ください。

海洋アライアンスホームページ：  
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

#### 海洋基礎生物学研究推進センター

「海洋基礎生物学研究推進センター発足」開催される

123年の歴史を誇る理学系研究科附属臨海実験所内に設置された「海洋基礎生物学研究推進センター (CMB)」の発足式が、12月11日(金)に執り行われた。当日は、各部局代表の運営委員の挨拶に続き、稲葉一男 筑波大学臨海実験センター長、浦環 本学海洋アライアンス機

構長、山形俊男 理学系研究科長からの祝辞があった。また、発足式にあわせて看板の除幕式が行われた。

CMBは、本学各部局の海洋生物学研究者の知の統合を図り、戦略的な研究を展開することを目的としている。また、共同利用・共同拠点として全国および世界の海洋生物学拠点との連携促進が期待されている。



海洋基礎生物学研究推進センター除幕式

#### 地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA)

第5回統合的な地球観測システムを利用したアジア水循環イニシアティブ国際調整グループ本会合 (GEOSS-AWCI ICG)、開催される

12月15日(火)から17日(木)までの3日間、本学浅野キャンパス武田先端知ビル武田ホールにて、地球観測データ統融合連携研究機構機構長(小池俊雄教授)が主催する、アジア水循環イニシアティブ(AWCI)に関する国際会議が行われた。

アジア水循環イニシアティブ(AWCI)は、地球観測に関する政府間部会(GEO)の枠組みで、アジア19カ国が協力して、2005年11月に本学で立ち上げられたもので、2007年12月には、大分県別府市で開催された第1回アジア太平洋水サミットの関連イベントとして同市内でAWCIシンポジウムを行い、その場で実施計画を採択した。AWCIでは、洪水、渇水、水質問題、気候変動への適応策をテーマとして、18の河川流域(中国を除く各国1河川)を対象にデモンストレーションプロジェクトを実施している。当機構(EDITORIA)では、国家基幹技術「海洋地球探査システム-データ統合解析システム(DIAS)」の一環として、AWCIの推進に取り組んでいる。

このたびの第5回会合では、渇水、雪氷・氷河湖決壊、台風・洪水と気候変動への適応策を主に、能力開発を含めて、集中的な議論が行われた。次ページにプログラムを掲載している。会議の冒頭では、本学を代表して松本洋一郎理事(副学長)にご挨拶をいただいた。文部科学省からは森本浩一審議官にお越しいただき、アジアの水問題の解決に取り込み、着実に成果をあげているAWCIの取り組みに対し、温かい激励のお言葉もいただいた。



松本理事（副学長）（左）と文部科学省森本審議官（右）

また、15日（火）の午後には、国際水資源協会（IWRA）との共同シンポジウムが行われ、参加者総数は、世界22カ国から、146名にも上った。この共同シンポジウムの中では、本学の名誉教授である高橋裕先生の長年の水文分野のご研究に対するご功績を称えて、特別セッションが設けられた。

続く17日（木）午後から18日（金）にかけては、渇水・土壌水分観測の能力開発プログラムによるワークショップが、中国科学院大気物理研究所と宇宙航空研究開発機構の主導により実施され、衛星観測による土壌水分観測および干ばつのモニタリングをテーマに、専門家による講義が行われ、アジア各国の若い科学者たちが積極的に参加し、新しい知識を学ぶ貴重な機会を得た。

AWCI国際会議のプログラム、写真、詳しい発表内容については、下記、AWCI会議のURLをご参照ください。  
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/awci/5th/index.html>

#### プログラム概要

##### 5<sup>th</sup> ICG meeting of GEOSS-AWCI

1. Opening
2. Activity Reports
3. “Capacity Building” Implementation Plan Development  
*IWRA-GEOSS/AWCI Joint International Symposium*
4. Toward Actual Collaboration among Climate, Water Cycle, and Disasters
  - 4.1 GEO work plan progress
  - 4.2 Summary of the Discussion in Kyoto and the Following Survey
  - 4.3 Drought
  - 4.4 Snow, Glacier and GLOF
  - 4.5 Typhoon, Cyclone, and Induced Floods
  - 4.6 Climate Change Adaptations
5. Technical Reports from Data Integration and Analysis System -Data & Meta Data Archive-Modeling
6. Breakout Sessions for Harmonization
  - 6.1 Climate Change Adaptations-Drought
  - 6.2 Climate Change Adaptations  
-Snow, Glacier and GLOF
  - 6.3 Climate Change Adaptations  
-Typhoon, Cyclone, and Induced Floods
7. Summary Session
  - 7.1 Breakout Session Reports
  - 7.2 Wrap-up



AWCI 集合写真

お問い合わせ先：

地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）事務局

メール：editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp

電話番号：03-5841-6132

数物連携宇宙研究機構

一般

米カリフォルニア大学バークレイ校  
と全学国際学術交流協定を締結

東京大学と米カリフォルニア大学のバークレイ校は、12月17日（木）、大学間協力の協定書に署名した。2つの大学は今まで以上に教育、研究面で積極的に人材を交流していくことになった。

東京大学とバークレイ校は共に世界最高レベルの高等教育、研究活動を行っている大学として知られている。例えば上海交通大学の2009年版の大学ランキングでは東京大学はアジア・太平洋地区で1位、バークレイ校は全米で3位、となっている。また、東京大学は国立、バークレイ校は州立であり、公共教育の理念に基づき比較的低い学費で高度な教育を提供することを可能にしている。歴史も規模もほぼ同じで、東京大学は1868年、バークレイ校は1869年に創設、学部から大学院まで合わせた学生総数は東京大学が約2万9千人、バークレイ校が約3万5千人である。

本学の濱田純一総長は「理念を同じくする世界最高峰の大学同志でこのような協定を結び、人材交流を盛んにしていくことは、これからの東京大学の世界戦略の中で大変大きな意義がある。またバークレイは国際化の面では東京大学より進んでおり、学ぶところもたくさんある。今後積極的に情報を交換し、いずれは東大の学生がバークレイの講義をとることもできるようにしていきたい。」と語っている。バークレイ校のロバートJ.バージュノー総長も喜びを隠せず、「今バークレイではアジアに非常に注目しており、東京大学はアジアでのトップだ。アジアへの大きな足がかりとして東京大学との協力は不可欠だ。今後の協力関係に大いに期待している。」と述べている。

今回の協定は田中明彦理事（副学長）を中心に本部で推進して締結に至った。実際のバークレイ校側との交渉

や連絡には幹事教員として大学院理学系研究科副研究科長の相原博昭教授と、東京大学とバークレイ校双方に籍を置いている村山斉数物連携宇宙研究機構長があたった。

数物連携宇宙研機構では、協定に基づいて将来的には全学的な海外拠点となることを目指してバークレイ校の物理学教室にサテライトの設置を進めることとしており、これらを通じて、東京大学とバークレイ校との交流の一層の発展が期待される。

村山機構長は「サテライトはアメリカでの人材発掘・リクルートや研究交流の足がかりになる。専任研究者には毎年一ヶ月以上の海外出張を義務づけているので、これで行き先も確保できる。いずれ東大の他部局からの学生やビジターもサポートできる東大の海外拠点となっていくと願っている。」とコメントしている。



協定書を手にする濱田総長



UC バークレイ バージュノー総長と村山機構長

## 海洋アライアンス 山口県で出前授業を開催



海洋アライアンス（機構長 浦環 生産技術研究所 教授）では、次世代の子供たちに海の楽しさを伝えるための出前授業を行っている。このたび海洋アライアンスの特任准教授の福島朋彦が、山口県宇部市にある慶進中学校に招かれ、沖ノ鳥島の現状と課題について講義してきたので、その様子を報告する。

12月18日（金）、小雪がちらつく宇部空港に到着すると、「東京大学 福島准教授」の紙を広げた慶進中学・高等学校推進室長の加治先生に迎えられた。車で案内された学校は宇部市の中心にありながらも閑静な佇まいである。加治先生が「古くてねえ」と謙遜する校舎であるが、本郷の工学部3号館に暮らす身には「清潔」そのものに映った。

慶進中学・高等学校は、男女共学の中高一貫教育の進学校である。本学への関心も高く、中学の修学旅行では毎年本郷キャンパスに訪れているとのことである。また高等学校には今春本学を受験する生徒もいるようだ。

学校では校長をはじめ、担任、教務担当の先生方の歓迎を受けてから、中学3年生の2クラス合同の授業を始めた（同校は1学年2クラスの少数精鋭主義である）。授業は2コマ連続で行い、前述の先生方のほか地元の新聞社（宇部日報）も取材をかねて参加したので生徒たちはさぞかし緊張したことと思う。

冒頭15分は、学校の依頼により、本学の紹介を行った。そのなかで東大生のイメージを尋ねてみたところ、「エリート」、「カッコイイ」のほかに、「なよなよしている」があったのには思わず吹き出してしまった。また本学卒業のノーベル賞受賞者の紹介の中で山口県出身の佐藤栄作首相の写真を見せたのだが、あまり馴染みがなく、時代の移り変わりが感じられた。



授業の風景

本題の沖ノ鳥島の講義では、興味を持ってもらうためにクイズ形式をとった。例えば、「沖ノ鳥島に最も近い

島は?」「その島とは何海里離れている?」「1海里は何メートル?」「1海里の長さはどうやって決めた?」などである。

生徒たちは皆礼儀正しく、終始真面目に耳を傾けてくれて、とても有難かった。最後には生徒代表による感謝の言葉があり、全員の拍手に送られて教室を後にした。

ほんの2コマの授業ではあったが、沖ノ鳥島のこと、海のこと、国際協力のことなどが頭の片隅に残ってくればうれしい。そう思いながら帰りの飛行機に乗り込んだ。



翌日、宇部日報に紹介された出前授業

海洋アライアンスでは、海洋生物から海洋資源まで、多岐にわたる出前授業を用意して、海にも山にも出かけます。詳しくは海洋アライアンスホームページをご覧ください。

海洋アライアンスホームページ：  
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>

**本部業務改善グループ**  
**2009年度業務改善総長賞表彰式**

**一般**

12月18日(金)、安田講堂において、2009年度業務改善総長賞表彰式が業務改善プロジェクト推進本部の主催で開催された。

業務改善プロジェクト推進本部では今年度も業務改善の募集を行い、90件の応募があった。表彰式では、応募

募課題の中から厳正な審査の結果選出された総長賞(海外研修)1件、総長賞(国内研修)2件、理事賞3件、特別賞3件に対し、濱田純一総長及び久保公人理事から表彰状・副賞が授与された。

表彰に引き続き、濱田純一総長が職員への講話を行った。世界一の大学を目指す東京大学において、今までの業務改善の成果を高く評価するとともに、今後も業務改善でも世界のトップを目指して頑張っていって欲しいとの期待が語られた。また、「いまの東京大学で、無駄な仕事が行われているとは基本的に考えていない。皆さんがやっている仕事は、それぞれに大学の教育研究活動にとって意味のある仕事である。しかしこれからは、仕事の効率をさらに高めるとともに仕事に優先順位をつけ、『スリムな組織、スマートな運営、スピーディな業務』を目指すことが必要になってくる。大きな枠組みの中での業務改善を大胆に考えていきたい」と次の展開に向けたメッセージが送られた。

※業務改善グループHPにて総長講話全文の閲覧、および動画の視聴ができます。

続いて、受賞者による取組課題プレゼンテーションが行われた。取り組みの過程や成果がわかりやすく伝わり、来年度に向けての取り組みが期待される内容であった。

最後に業務改善担当の久保理事から講評があり、式を締めくくった。

なお、当日は昨年並みの約500名の教職員が参加し、表彰式をともに祝った。



総長から表彰状を受け取る受賞者

- 総長賞(海外研修)  
 「図書館問返送管理システム『楽返くん』の全学図書館・室導入による業務効率化」  
 図書返送効率化プロジェクト(代表者:小林 幸志)
- 総長賞(国内研修)  
 「ノートパソコンリユース事業」  
 本部財務系資産経営グループ(代表者:青木 志帆)  
 「不要物品再利用システム及び体制の構築」  
 医科学研究所事務部経理課用度係(代表者:菊池 健)

○理事賞（自己研鑽費用補助）

「旅費制度全面改正による業務の簡素・合理化」  
旅費制度検討プロジェクト（代表者：生越 浩二）  
「教授会等の運営形態の見直し、配付資料の削減及び出退表示方法の改善について」

教養学部教授会運営検討WG（代表者：木村 久）  
「大学院入試検定料のコンビニ収納・クレジット決済の導入」

本部経理グループ（代表者：加藤 信義）

○特別賞（コミュニケーションセンター商品）

「医療材料等調達支援用システムの開発」  
医学部附属病院管理課経理チーム（代表者：渡邊 仁之）  
「入退院手続きの効率化による患者待ち時間の短縮」  
医学部附属病院医事課入院チーム・収入管理チーム（代表者：高梨 芳郎）  
「各種電子化による業務運営改善」  
地震研究所庶務チーム・研究支援チーム（代表者：武田 いづみ）



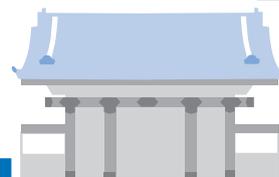
受賞者一同。総長を囲んで記念撮影

※各課題の詳細につきましては業務改善グループHPをご覧ください。

[http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen6/index\\_j.html](http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/gakunai/gen/gen6/index_j.html)

（東大ポータルトップページ→「事務組織/所掌/座席表」→業務改善G）

## 部局 ニュース



### 史料編纂所

#### アフターヌーンセミナー2009の開催

11月11日（水）午後、山上会館で「正倉院文書調査120年の歴史」と題してアフターヌーンセミナー2009を開催した。

史料編纂所は、日本史研究の基幹となる史料の調査・収集・研究・編纂・出版事業を継続しており、セミナー企画3年目の今回は、古代史料をテーマとした。

奈良・東大寺由来の正倉院は、その建物が世界遺産に登録され、多くの美術工芸品を現代まで収蔵・伝承して来たが、古代の一次史料の宝庫でもある。

史料編纂所では、1901（明治34）年発刊の『大日本古文書』（編年文書）巻1以来25冊の『正倉院文書』を出版し、新たな原本調査を続け、1987年（昭和62）発刊の『正倉院文書目録』を6冊公刊している。

長期継続中の史料群調査の成果・蓄積を、研究所の出版物・所蔵史料等とともに担当教員が披露し、あわせて東京国立博物館平成館での展覧会「御即位20年記念特別展『皇室の名宝—日本美の華』」（第2期会期11月12日（木）～11月29日（日）、正倉院宝物の美術工芸品等を10年ぶりに東京で公開）を紹介し、日本の古代について学ぶ集いとした。

13時からの加藤友康所長の挨拶に続き、山口英男教授「調査の実際と120年の成果」及び田島公教授「正倉院文書の国際性」の講話各1時間、茶菓を交えての参加者15名の自己紹介と質疑・懇談を行った。

本セミナーは、参加諸氏の歴史への強い関心や地道な基礎研究への理解にも助けられ、盛会のうちに終了した。



山口教授の講話



田島教授の講話



屋台ボランティアの紹介

**生産技術研究所**  
**外国人研究者・留学生との懇談会開催される**

11月11日（水）夕刻、駒場リサーチキャンパスのA棟コンベンションホールとホワイエを利用して、生産技術研究所主催の「外国人研究者・留学生との懇談会」が開催された。

これは10月8日（木）に中庭で計画していた同懇談会が、大型台風の直撃を受け中止されたために、計画を大幅に変更して開催されたものである。10月に予定していた懇談会の参加登録者数は500名近くいたが、今度は天気の影響を受けないように、室内での開催としたため、参加者は外国人研究者・留学生と10月にボランティア登録された日本人、合わせて約200名に制限せざるを得なかった。

まず、出店を計画していた10の屋台（ブラジル、中国、フランス、ハンガリー、インド、韓国、スイス、トルコ、日本2）のグループごとに、プロジェクター等を用いてグループ紹介をし、交流のきっかけを作った。それぞれ短い時間で、各国の風土と作られるはずだった料理などをアピールする姿が印象的であった。ホワイエでは、料理に替えて各国の特色ある飲み物が用意され、大いに味わうことができ、随所で交流の輪ができた。またライブ演奏も加わり、場を盛り上げてくれた。

料理こそ味わえなかったものの、熱の入った各国グループの紹介は味わい深いものであった。



懇談会の模様

**大学院人文社会系研究科・文学部、大学院教育学研究科・教育学部、大学院理学系研究科・理学部**  
**進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催**

11月11日（水）小柴ホールにて、将来の進路として教職に興味を持っている学生を対象に、進路セミナーを開催した。

小松久男大学院人文社会系研究科長・文学部長のあいさつの後、本学卒業生である都立高の教諭2名、校長1名、教育学部附属中等教育学校教諭1名が、それぞれの経歴や教員を志した理由、また現在教員としてどのような日々を送り、何を感じているかなど具体的な経験をまじえながら「学校の先生」という仕事の魅力について講演した。

現職の「学校の先生」が語ることばに、真剣なまなざしで聞き入りながらも、ときおり爆笑が起こるなど、学生たちの素直な反応が多く見られた。質疑応答では熱心な質問が相次ぎ、講演した先生その他、当日ご協力いただいた都立高の校長数名もそれに答え、教育者としての情熱にあふれた回答の数々によって、ますます質問の手が上がり、会場内は最後まで熱気に満ちていた。

セミナー終了後、会場前に場所を移して設けた懇親の場では、打ち解けた空気の中で、学生たちが先生を囲み、さらに具体的なアドバイスを受けるなど、盛会のうちに

終了した。

来年度も引き続き、同セミナーを開催する予定である。



会場の様子



セミナー後の懇談会

大学院教育学研究科・教育学部  
第5回公開講座「自らを傷つける子どもたち」開催される

11月21日(土)、大学院教育学研究科附属心理教育相談室(室長 中釜洋子教授)が主催する公開講座「自らを傷つける子どもたち～自傷行為の理解と予防に向けて～」が本郷キャンパス 小柴ホールにて行われた。

心理教育相談室では、心理・教育に関わる様々な問題の理解を深めることを目的に、公開講座を毎秋開催している。5回目となった今回は、リстокットに代表される自傷行為をテーマに2名の講演者を迎え、当日は、臨床心理士をはじめ、医療従事者、福祉、学校、宗教関係者、そして当事者やその家族など、様々なバックグラウンドを持つ約150名が参加した。

まず、国立精神・神経センター精神保健研究所自殺実態分析室長の松本俊彦氏が、「自傷の背景とプロセス」と題して講演を行った。松本氏は、自傷行為がこころの苦しみを紛らわせるための一時的行為でありながら、自殺につながる危険を持つことを指摘。周囲の大人たちが、自傷行為だけでなくその背景にあるこころの傷みに気づくことの重要性を訴えた。

続いて、都立松沢病院精神科部長・林直樹氏の講演「自傷行為の再発予防と回復」が行われた。臨床医でもある林氏は、豊富な経験をもとにいくつかの典型的なケースを提示。さらに、医療の現場で実際に行われている治療法やその効果が詳細なデータとともに紹介されると、参加者の多くがしきりにメモをとる様子が見られた。

後半では、教育学研究科高橋美保専任講師も交え、3名によるディスカッションが行われ、自傷行為を発見した際にとるべき対応や、当事者に接する際の医者やカウンセラーのあるべき態度などが議論された。最後に、フロアの参加者からも具体的な質問や意見が活発に出され、この問題に対する関心の高さが窺えた。



質問に答える講師の先生方

医科学研究所  
International Student Research Forum 2009 に参加

11月22日(日)から11月26日(木)の5日間、オーストラリア グリフィス大学・ゴールドコーストキャンパスにて International Student Research Forum 2009 が開催された。今年は日本、中国、アメリカ、オーストラリアから大学院生46名が参加し、研究成果の発表を通じて交流を深め合った。東大では参加者を公募した結果12名の応募があり、そのうちこれまでの研究実績及び応募動機の2つの観点から選抜した5名の博士課程大学院生(医科学研究所4名、先端科学技術研究センター1名)を代表として派遣した。

現在では規模も拡大し、名称も変更されたが、本フォーラムは元々2005年10月に医科学研究所主催で開催された東大・中国科学院学生フォーラムに端を発する。現在は東大医科研、中国科学院、米ネブラスカ大学メディカルセンター、そしてオーストラリアで最も実力を伸ばしつつあるグリフィス大学の4校がコア・メンバーとなっており、持ち回りで主催している。グリフィス大学が主催校となるのは今回が初めてであった。同校の主な研究成果には、インフルエンザウイルス抑制剤の開発(Mark von Izstein教授)、成体ラット鼻組織からの多能性幹細胞

胞の分離 (Alan Mackay-Sim 教授) などがある。

研究発表セッションは23日(月)、24日(火)の2日間に行われた。各大学の学生リーダーは、フォーラム運営に携わるほか、セッションの座長も務める。本フォーラムはバイオメディカルをメインテーマとしているが、中にはエコロジー分野の研究発表や、雄ミバエ間の求愛行動を抑制する遺伝子についての研究発表などもあり、大変興味深かった。

また、セッションの他にグリフィス大学の所有する研究所への訪問やオーストラリア文化体験など、参加者同士の交流を深めることのできるイベントも行われた。中でも、歓迎会でのバーベキューとオーストラリア先住民(アボリジニ)の皆さんによるダンスパフォーマンス、ローンパインコアラ保護区は特に印象的であった。

大変意義のある、充実した5日間のフォーラムは参加者にとって大変貴重な経験となった。企画・運営にご尽力頂いたグリフィス大学の方々に感謝申し上げたい。



コア・メンバー4校の学生リーダーによる記念品交換



オーストラリア先住民の皆さんとともに

大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる

部局

11月28日(土)10時から、三鷹国際学生宿舎において、三鷹消防署の指導・協力により自衛消防訓練が行われた。三鷹国際学生宿舎は、鉄筋コンクリート3階建て6棟

から成り、現在教養学部在籍する学生及び留学生等約570名が入居している。建物は耐火建築であるが、宿舎の性格上火災等の防災には十分注意を払っており、その一環として万一の場合を想定し、年に1回自衛消防訓練を実施している。

当日は晴天に恵まれ、留学生を含む宿舎生及び宿舎職員、警備員約40名が参加して実施された。

訓練は、宿舎生の居室から火災が発生したことを想定して、火災報知器の発報により、宿舎生、警備員、職員それぞれがどのように対応し、安全に避難するかを確認する避難訓練から開始した。

その後、2班に分かれ、水入り消火器を使用しての消火訓練、屋内消火栓を使用しての放水訓練を交代で行った。

初めて消火器に触る宿舎生が多く、全員が実際に水入り消火器を使用しての訓練を行えたことは、とても有意義であった。

最後に、今回指導をいただいた三鷹消防署より講評をいただき、訓練は終了となった。



水入り消火器による消火訓練



屋内消火栓による放水訓練

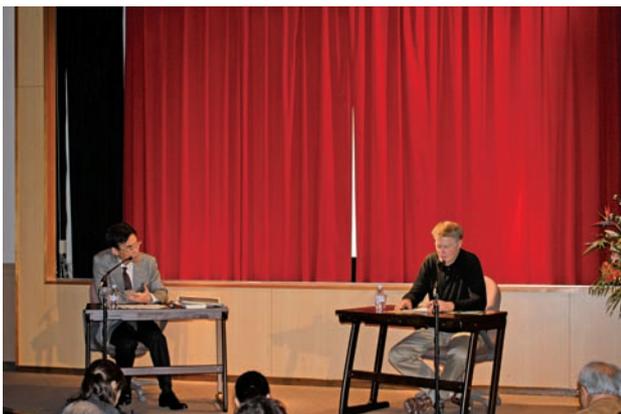


2008年度ノーベル文学賞受賞作家  
ル・クレジオ氏の講演会「フィクションという探求」を開催

2008年度ノーベル文学賞を受賞したフランスの作家ジャン＝マリ・ル・クレジオ氏がこのほど来日、11月29日（日）に人文社会系研究科において、「フィクションという探求」と題する対談形式の講演会（同時通訳付き）を行なった。聞き手は、中地義和教授（フランス語フランス文学研究室）。法文二号館一番大教室（220席）と、ビデオ同時中継用の二番大教室（150席）はともに満席。補助席と立ち見を合わせて学内外から450人が来場し、2時間に及ぶ対談に聴き入った。

話題は、1967年の初来日のころと比べて日本がいかに変ったかという印象から始まり、63年のデビュー作『調書』以来半世紀近くに及ぶ氏の作品の変遷と一貫性の議論を軸に、文明・文化の混淆の地、南仏ニースで過ごした幼少年期、フランス革命のころインド洋上のモーリシャス島に移住した父祖をもつ作家が抱える二重の帰属、デビュー作に影を落とすアルジェリア戦争、インドオ世界から得たもの、ロートレアモン、ランボー、ミショーといった詩人たちへの共感、子供のころから親しんできた映画——溝口、小津ら日本映画へのオマージュ——など、多岐にわたった。ル・クレジオ氏はどの質問にも言葉を尽くして丁寧に答え、ポストコロナル時代に生きる作家の倫理性にきわめて意識的な話の内容と相まって、誠実な人柄のにじみ出る語り口に聴衆は深い感銘を受けた。

なお、当日の対談の様子は、近く雑誌『すばる』に掲載される予定である。



対談中のル・クレジオ氏（右）と中地教授



「文学とは断言ではなく問い」と語るル・クレジオ氏



動物慰霊祭開催される

12月4日（金）11時から弥生キャンパス内動物慰霊碑前において動物慰霊祭が行われた。祭式は明石博臣獣医学専攻長及び佐々木伸雄附属動物医療センター長の慰霊の言葉に始まり、多くの参列者が、教育・研究に供され生命科学の発展に大きく寄与した動物の御霊に思いをいたし献花を行った。

本研究科動物慰霊祭は通算で91回を数えることとなり、当日は快晴の天候の中、200名を超える参列者があった。



献花を行う生源寺眞一研究科長（左）と明石獣医学専攻長



参列者

大学院工学系研究科・工学部



航空イノベーション総括寄付講座  
CAIR 日仏合作グライダー100年  
記念講演会式典開催

100年前の1909年12月、フランス大使館付武官ル・ブリュール、海軍大尉相原四郎、東京帝大教授田中館愛橋の3名が、第一高等学校構内（現在の農学部キャンパス）と上野公園でグライダーの牽引飛行に成功した。これを記念して12月9日（水）、航空イノベーション総括寄付講座が事務局となり、東京大学、在日フランス大使館、航空宇宙会（航空宇宙工学科同窓会）の共催により、安田講堂において記念講演会と式典が開催された。

約500名の参加の中、岡野まさ子特任准教授（CAIR）の司会により開始され、開会の辞として、濱田純一総長より田中館教授の紹介と「大空へのチャレンジを果敢に試みた先駆者の存在と、フランスとの古くからの絆も思い出しながら、次の時代に向けて大胆に飛翔していく覚悟を新たにしたい」との挨拶のあと、フローランス・リヴィエール＝プリス在日フランス大使館科学技術参事官から「100年前の日仏の協力のように、新たな航空のコンセプトの創出に力をあわせてほしい」との挨拶があり、保立和夫工学系研究科長からは西洋化をめざした当時の大学とは別の意味で国際化を目標としたバイリンガルキャンパス構想が紹介された。基調講演では、航空史家の村岡正明氏から日仏三名の出会いとその活動が説明されたあと、GIFAS（フランス航空宇宙工業会）日本委員会のジャンポール・パラン氏とミッシェル・テオヴァル会長から航空分野における日仏の交流史と、航空宇宙産業の活動状況等が紹介され、ブノワ・リュロー在日フランス大使館商務官からフランスの航空科学関係大学での取り組みが説明された後、鈴木真二教授（工学系研究科、CAIR）から航空イノベーションの実現に向けた国際連携の重要性が指摘された。

後半は、相原氏の孫にあたる相原宏徳氏、田中館教授のひ孫にあたる松浦明氏を交えたパネル・ディスカッションが日本航空協会の酒井正子さんの司会により進行的。その後、ダッソー・システムズのベルトラン・サ

ンマルタン氏からコンピュータモデルの航空機開発への応用に関して講演があり、CGによる当時の飛行の再現が公開され、最後に航空宇宙工学科・大学院航空宇宙工学専攻の学生により製作された10分の1サイズのグライダー模型による会場内のフライトが披露され、五代富文航空宇宙会会長による閉会の辞により終了した。CGモデルと模型はリチャード・アンセル氏が当時の写真から再現した精密イラストを参考に製作され、当日は同氏も出席された。

同日、夕刻より、山上会館において東京大学、在日フランス大使館主催のレセプションが中村裕子特任研究員（CAIR）の司会により開催され、江川雅子本学理事とフローランス・リヴィエール＝プリス参事官の挨拶の後、戸矢博道全日本空輸（株）常勤顧問による乾杯があり、日仏関係者の懇談の宴が催され、実行委員を代表してフランス側からミッシェル・テオヴァル GIFAS 日本委員会会長と東大側から鈴木真二教授による挨拶によって閉会となった。



1909年12月9日、不忍池での飛行  
（村岡正明著「航空事始」より）



フローランス・リヴィエール＝プリス在日フランス大使館  
科学技術参事官の挨拶（撮影、Ken Friedl）



山上会館でのレセプション（撮影、酒井徹也）

## 医科学研究所

部局

### 医科学研究所附属病院でクリスマス・コンサート開かれる

12月15日(火)、医科学研究所附属病院において恒例のクリスマス・コンサートが開催された。今年は、歌手の松谷麗王さんと自由が丘ゴスペル・クワイアから約30名の皆さんが出演され、ゴスペル曲の合唱を聴かせてくださった。ゴスペル・クワイアは、自由が丘周辺でチャリティー・イベントなどの活動をしている総勢50名ほどのグループで、松谷さんとともに今回のコンサートへの出演を、快くお引き受けくださった。会場となった病院棟8階のトミーホールの壁やガラス窓にはクリスマスの装飾が施され、照明を落とした室内は、イルミネーションの光が窓の外の夜景と相まってクリスマスらしい雰囲気包まれた。

山下直秀病院長の挨拶の後、まずキリストを讃える曲「ホザンナ」の合唱で始まり、続いて「My Life, My Love, My All」や、ベートーベンの「交響曲第九番」をゴスペル風にアレンジした「Joyful Joyful」などの曲を、美しいハーモニーと力強い歌声で聴かせてくださった。さらに松谷さんが、ピアノ弾き語りによる「Amazing Grace」を熱唱された後、再び皆さんで「もろびとこぞりて」や「Holy Night」、「歓喜の歌」などおなじみのクリスマス曲をゴスペル風で合唱され、聴衆も曲に合わせて手拍子を打ち、一緒になって演奏を楽しんだ。

コンサート会場には、入院中あるいは外来通院中の患者さんのほか、ご家族やお見舞いの方々、医師、看護師等病院関係者(サンタやトナカイの着ぐるみを着た先生方、お疲れ様でした。)など100人を超える人達が集まり、一足早いクリスマス気分を堪能した。最後に尾上裕子看護部長から出演者への感謝の言葉と、来場者へのご挨拶で、約1時間20分にわたるコンサートは、温かな雰囲気の中に幕を閉じた。



熱唱する自由が丘ゴスペル・クワイアの皆さん



熱唱に聴き入る会場の皆さん

部局

## 附属図書館、大学院情報学環、社会科学研究所、史料編纂所

### 総合図書館棟ポーチ外灯復元記念披露及び点灯式

12月22日(火)16時から総合図書館棟において、正面玄関ポーチ外灯復元記念披露及び点灯式が開催された。式では、濱田純一総長、吉見俊哉前情報学環長の挨拶に引き続き、寄附者代表ならびに関係理事・部局長によるテープカットが行われ、戦後66年の時を経て、外灯が復活した。なお、参加者は、本学図書館団地関係教職員及び学生等、併せて約150名であった。



テープカット



史料編纂所前の門灯



12月22日(火)に小柴ホールにて、大学院工学系研究科総合研究機構の光量子科学研究センター(PSC)およびレーザーアライアンスによる合同シンポジウム、そして光量子科学研究センターが進めている文部科学省「最先端の光の創成を目指したネットワーク研究拠点プログラム(光拠点プログラム)」による事業「光量子科学アライアンス(APSA)」の主催によるセミナーが開催され、学内外および企業より約100名の参加があった。

五神真教授(PSCセンター長)の開会の辞、保立和夫教授(工学系研究科長)の挨拶に引き続き、前半はAPSAセミナーとして石川顕一特任准教授(PSC)および板谷治郎特任講師(物性研究所)により、強い光場と物質の相互作用に関する理論および実験の現状について学生向けのレビューを含めた講演が行われた。後半のシンポジウムでは、大森賢治教授(自然科学研究機構分子科学研究所)、田畑仁教授(工学系研究科バイオエンジニアリング専攻)による招待講演が行われ、活発な討論が行われた。最後に山内薫教授(理学系研究科化学専攻)による閉会の辞において、現代の光科学においては、物理も化学も理学も工学もなく、光という共通の基盤で連携することが重要であることが再確認できると総括された。

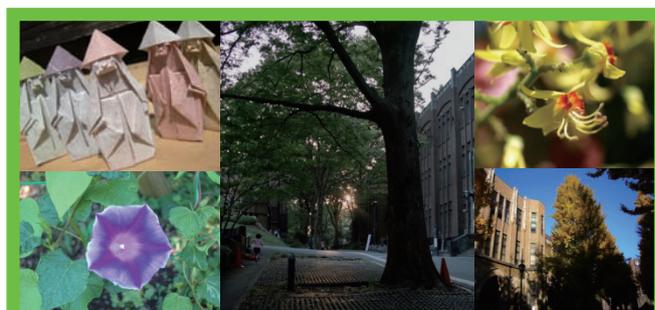
シンポジウム・セミナーの後にホール前のホワイエにおいて懇談会が行われ、佐野雄二博士(東芝(株)、光拠点プログラム・プログラムオフィサー)によるご挨拶をいただいた。引き続き参加者間の活発な議論が行われ、盛会のうちに閉会した。



シンポジウムにて挨拶される保立研究科長



講演者4名：(左上) 石川准教授 (右上) 板谷講師  
(左下) 大森教授 (右下) 田畑教授



## あなたの撮った写真を 学内広報に載せませんか？

学内広報では教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

### ■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること  
本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。
2. デジタルデータで送付すること  
撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。
3. 1回の応募につき3枚まで受付  
多量の写真データ送付はご遠慮ください。  
(添付ファイルの合計容量は5MBまで)

### ■掲載基準&掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

### ■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

### ■送付先

本部広報グループ広報企画チーム  
「学内広報写真募集係」まで。  
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

朝陽に輝くコケ



11月の雨上がり、朝陽に照らされたコケがキラキラと輝いていました。苔生すほどの歴史を感じさせないポップなグリーンでした。(社研正面玄関にて)

(撮影：社会科学研究所 係長 門馬清仁さん)

秋の赤い実



昨年度、駒場へ4学期の講義に出かけたときに、葡萄の様に房状になった赤い実だけが残った大樹を見つけて、何の樹だろうと思ったのでした。この秋、山上会館の脇に、これと同じ実をつけた樹を見つけました。そして秋の紅葉の盛りも過ぎ、樹々の葉もすっかり落ちてしまったこの頃、三四郎池の周りに何本かある、赤い実が一際目立っている樹がそれと同じ種類の樹であると気付きました。イイギリという樹だそうです。食べごろに熟したのか、ヒョドリがついばむシーンも多く見られるようになりました。



(撮影：理学系研究科 教授 柴橋博資さん)

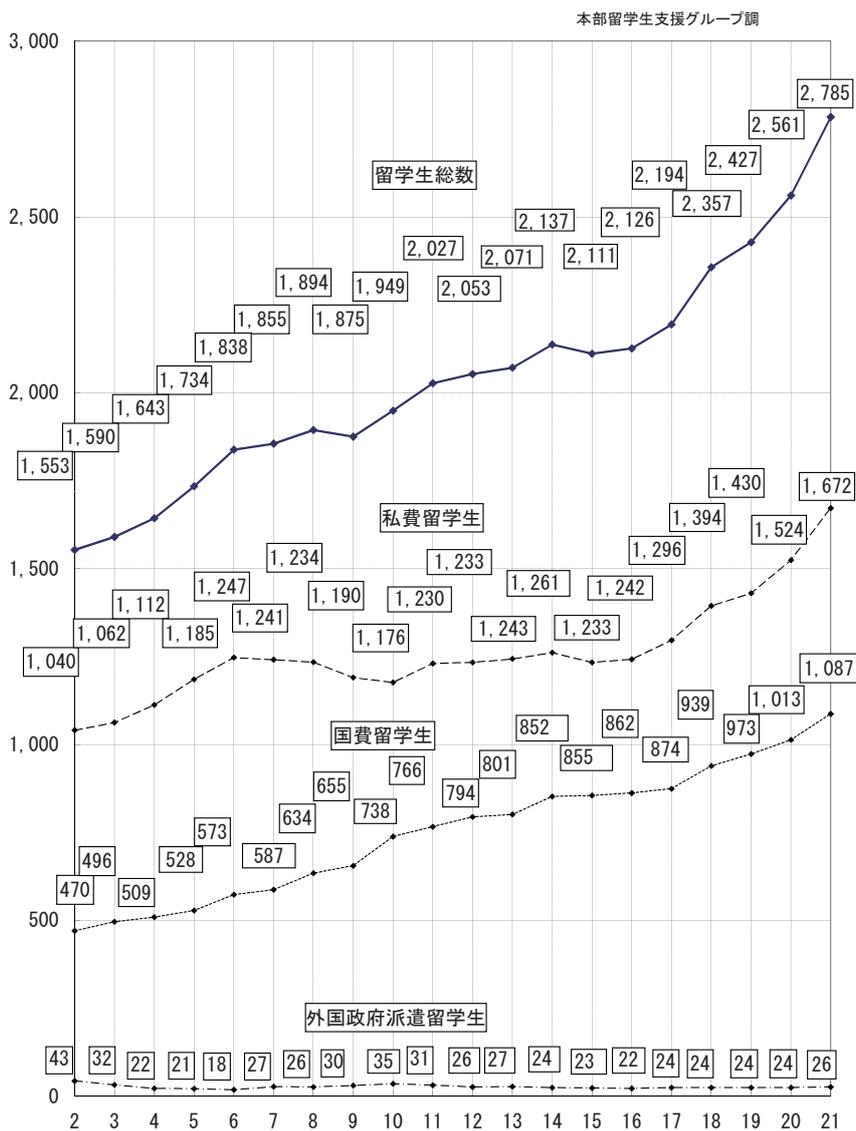


## 本部留学生支援グループ

平成21年度外国人学生数－国費外国人留学生数1,087人、私費外国人留学生数1,672人、外国政府派遣留学生数26人、その他の外国人学生(在日外国人学生)数269人－

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の外国人学生数を調査している。これをもとに各年度11月1日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、2009年11月1日現在の外国人学生数は以下のとおりである。

### 東京大学外国人留学生受入数の推移 (各年度11月1日現在)



### 全学生数に対する外国人留学生数の比率

事 項	A 全学生数 (人)	B 日本人学生数 (人)	C 外国人留学生 (人)	C/A 比 率	平成20年度 比 率
学部レベル	14,101	13,651	283	2.01%	2.01%
大学院レベル	14,553	11,922	2,502	17.19%	15.92%
計	28,654	25,573	2,785	9.72%	9.02%

※全学生数欄には「その他の外国人学生」(在日外国人学生)を含む。  
 ※学部レベル全学生数及び外国人留学生数には、学部特別聴講学生30名を含む。  
 ※大学院レベルの全学生数には、大学院特別聴講学生12名及び大学院科目等履修生82名を含み、外国人留学生数には大学院特別聴講学生12名を含む。  
 ※研究所に所属する研究生28名は大学院レベルの全学生数に含め、そのうち外国人研究生16名は、外国人留学生数にも含む。  
 ※比率欄の数は四捨五入。

平成 21 年度 外国人学生数

平成 21 年 11 月 1 日現在

区 分	学部				大学院								研究所等		合 計			
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生				研究生	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国費 (a)	85	35	0	0	166	125	2	2	327	172	92	81	0	0	0	0	672	415
	120		0		291		4		499		173		0		0		1087	
外国政府派遣 タイ	4	3	0	0	2	1	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	9	5
	7		0		3		0		4		0		0		0		14	
外国政府派遣 マレーシア	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	0
	1		0		0		0		2		0		0		0		3	
外国政府派遣 シンガポール	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	2		0		0		0		0		0		0		0		2	
外国政府派遣 韓国	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0
	7		0		0		0		0		0		0		0		7	
計 (b)	14	3	0	0	2	1	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	21	5
	17		0		3		0		6		0		0		0		26	
私費 (c)	35	41	20	23	262	215	5	5	352	299	150	159	9	5	7	4	840	751
	76		43		477		10		651		309		14		11		1591	
小計 (d) ((a) + (b) + (c)) (在留資格「留学」の者)	134	79	20	23	430	341	7	7	684	472	242	240	9	5	7	4	1533	1171
	213		43		771		14		1156		482		14		11		2704	
私費 (e) (在留資格「留学」以外の者)	16	11	0	0	6	6	1	0	12	9	7	7	0	1	4	1	46	35
	27		0		12		1		21		14		1		5		81	
外国人留学生合計 (f) (d) + (e)	150	90	20	23	436	347	8	7	696	481	249	247	9	6	11	5	1579	1206
	240		43		783		15		1177		496		15		16		2785	
その他の外国人学生 (g)	117	23	0	0	41	20	6	1	33	25	1	2	0	0	0	0	198	71
	140		0		61		7		58		3		0		0		269	
外国人学生 総計 (f+g)	267	113	20	23	477	367	14	8	729	506	250	249	9	6	11	5	1777	1277
	380		43		844		22		1235		499		15		16		3054	

学部及び研究科等別外国人留学生数

平成 21 年 11 月 1 日現在

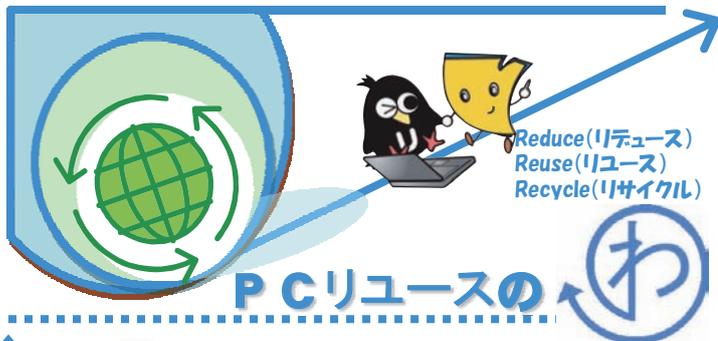
区 分	学部				大学院								研究所等		小 計		合 計	
	学生		研究生等		修士課程		専門職 学位課程		博士課程		外国人 研究生等		大学院 研究生					
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費
学部																		
教養学部 (前期課程)	65	58															65	58
法学部	6	5															6	5
医学部			1														1	1
工学部	28	27	7														28	34
文学部	4	3	1														4	4
理学部	2	1															2	1
農学部	2	6	6														2	12
経済学部	4	14															4	14
教養学部	6		28														6	28
教育学部	1	3															1	3
薬学部	2	3															2	3
小 計	120	120	43														120	163
大学院																		
人文社会系研究科					11	20			19	45	14	48		3			44	116
教育学研究科					4	13			3	27	3	10					10	50
法学政治学研究科					3	21	1	5	9	27	6	16					19	69
経済学研究科					11	9			2	5	2						15	14
総合文化研究科					27	47			33	92	29	36		3			89	178
理学系研究科					10	9			21	12	5	5		1			36	27
工学系研究科					120	168			207	209	38	93		4			365	474
農学生命科学研究科					14	38			77	66	24	33		3			115	140
医学系研究科					2	25		1	32	73	11	8					45	107
薬学系研究科					2	6			6	7	3	5					11	18
数理科学研究科					4	2			6	2	2						12	4
新領域創成科学研究科					39	64			32	61	6	18					77	143
情報理工学系研究科					26	35			36	34	18	11					80	80
学際情報学府					18	35			16	18	12	35		1			46	89
公共政策学教育部							3	5				5					3	10
小 計					291	492	4	11	499	678	173	323		15			967	1519
研究所等																		
医科学研究所																	1	1
地震研究所																	1	1
生産技術研究所																	11	11
分子細胞生物学研究所																	1	1
海洋研究所																	1	1
先端科学技術研究センター																	1	1
小 計																	16	16
合 計	120	120	43		291	492	4	11	499	678	173	323		15		16	1087	1698

国又は地域別外国人留学生数

平成 21 年 11 月 1 日現在

区 分	国費							私費							合 計						総計
	学部		大学院等					学部		大学院等					学部		大学院等				
	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	小計	学部	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	
アジア																					
パキスタン			2		14	1	17			2				4			4		16	1	21
インド	1				14	2	17			3		6	1	10	1		3		20	3	27
ネパール			4		5	1	10			7		6	1	14			11		11	2	24
バングラデシュ	2		6		15	4	27	2		9		11		22	4		15		26	4	49
スリランカ	1		5		3	1	10			4		6	1	11	1		9		9	2	21
ミャンマー			2		5	3	10			3			2	5			5		5	5	15
タイ	12		21		29	12	74	7		9		20	6	42	19		30		49	18	116
マレーシア	9		7		10	2	28	1		5		7	2	15	10		12		17	4	43
シンガポール	3					3	6	2	3	2		1	2	10	5	3	2		1	5	16
インドネシア	5		8		14	3	30	1	17	1	13	5	37	5	1	25	1	27	8	67	
フィリピン			2		15	2	19		1	3		1	1	6		1	5		16	3	25
中国（香港）					4		4			2		2	1	5			2		6	1	9
韓国	24		59		94	24	201	25	5	110	5	192	57	394	49	5	169	5	286	81	595
モンゴル	10		4		4	1	19	2		6		4		12	12		10		8	1	31
ベトナム	22		17		18	1	58	1	2	19		19	2	43	23	2	36		37	3	101
中国	4		54	1	128	43	230	77	10	212	4	227	156	686	81	10	266	5	355	199	916
カンボジア			3	1	2		6										3	1	2		6
ブータン						1	1			2			2			2			1	3	
ラオス								1		1		2		4	1		1		2		4
マカオ	3						3							3							3
台湾								2	44	1	72	27	146		2	44	1	72	27	146	
中国（内モンゴ）										1			1			1				1	
小 計	96		194	2	374	104	770	118	24	461	11	591	264	1469	214	24	655	13	965	368	2239
中近東																					
イラン			1		10	1	12			1		7	4	12			2		17	5	24
トルコ			3		3	7	13					5		5			3		8	7	18
シリア			1		1		2										1		1		2
レバノン			1				1			1		1		2			2		1		3
イスラエル			1	1	2	4	8										1	1	1	2	4
ヨルダン			1		1		2						1	1			1		1	1	3
イラク					1		1												1		1
サウジアラビア						1	1													1	1
アフガニスタン					1	1	2												1	1	2
イエメン										1				1			1				1
小 計			8		18	12	38			3		13	5	21			11		31	17	59
アフリカ																					
エジプト			1		5	1	7		1			4	1	6		1	1		9	2	13
スーダン					2	1	3					1		1					3	1	4
チュニジア			2		3	1	6					2		2			2		5	1	8
アルジェリア			1				1										1				1
マダガスカル			1				1										1				1
ケニア											1		1						1		1
タンザニア	2					1	3				1		1	2					1	1	4
コンゴ民主共和国											1		1					1		1	
ナイジェリア				1			1												1		1
ガーナ			1				1					1	1			1			1	2	
モロッコ						1	1													1	1
エチオピア			4				4										4				4
ベナン			1				1										1				1
小 計	2		11		11	5	29	1				10	2	13	2	1	11		21	7	42
オセアニア																					
オーストラリア	1		3	1	3	3	11	2	1		2	1	6	1	2	4	1	5	4	17	
ニュージーランド			5		1	1	7			1		2		3			6		3	1	10
バブアニューギニア										1			1			1				1	
小 計	1		8	1	4	4	18	2	3		4	1	10	1	2	11	1	8	5	28	
北米																					
カナダ	1		3		3	1	8			5		6	1	12	1		8		9	2	20
アメリカ	3		9		12	3	27	2	4	8		7	13	34	5	4	17		19	16	61
小 計	4		12		15	4	35	2	4	13		13	14	46	6	4	25		28	18	81
中南米																					
メキシコ			1		2	2	5			1			1			2		2	2	6	
エルサルバドル	1						1								1					1	
コスタリカ			1		1		2										1		1		2
キューバ						2	2													2	2
ブラジル	6		13		14	7	40			1		5	1	7	6		14		19	8	47
パラグアイ			1				1			1			1			2				2	
アルゼンチン			2		1	1	4										2		1	1	4
チリ			2		1		3										2		1		3
ボリビア			1				1			1			1			2				2	
ペルー			1		1		2			1		3	4			2		4		6	
コロンビア			1		2		3			1		1	2			2		3		5	
ベネズエラ			3		1		4										3		1		4
パナマ			2				2										2				2
ジャマイカ			1				1			1			1			2				2	
ドミニカ国			1				1										1				1
セントルシア										2			2			2				2	
小 計	7		30		23	12	72			9		9	1	19	7		39		32	13	91





# PCリユースのわ

## 第③回 委託業者さん訪問記

1月某日。不用ノートPCの回収・再生をお願いしている美津野商事さんの本社ビルを訪問しました。学内で回収されたノートPCはこのビル6階のシステム事業部に納品されます。担当の川崎さんに入退室管理システムを解除してもらい、いざ入室。ちなみに、この部屋に部外者が入るのは私達が初めてだそうです。50畳程のお部屋の奥にあるリユースのための作業場でお話を伺いました。

この作業場に持ち込まれたPCはまず外見チェックが行われます。液晶のヒビやキーボードの状態などを確認し、明らかに使用できないものは除かれます。その後クリーニング作業に移り、キーボードの間隙のゴミ(ホチキスの芯等)を取り除き、本体の汚れは専用クリーナーで拭き取ります。汚れがひどい状態のPCはなんと1時間以上もかかるのだそうです。

「100%手作業ですが、学生さんのために少しでもきれいなものにと心掛けております」(石井さん)

第2工程は再生が可能かの確認です。HDDが壊れていないか、再セットアップCDがあるか、ない場合はメーカーから取得できるか、キーボードが実際に打てるか、CD-ROMが読み込めるかなど、細かくチェックをします。ここで合格したPCが学生さん向けのカatalogに掲載されます。



第3工程待ちのPC  
下はアダプタ等附属品

第3工程はいよいよ再生作業で、データ消去、OSやソフトのインストールです。必要に応じてHDDを取り外し、新しいHDDと交換。外したHDDはドリルで破壊します。「秋葉原ではノーブランドのHDDが売られていますが、わが社が交換するHDDは必ずメーカー品のものを使用しています」(川崎さん)

「回収の際、研究室や事務室の皆さんの対応がとても好意的で助かります」との感想もいただきました。



担当の川崎さんと石井さん  
いつもありがとうございます

今回の訪問でとても丁寧にリユースPCを扱っていただいているのが、伝わりました。

さて、2回目の募集が開始しています。これら再生ホヤホヤのPCが学生さんの手元に届くのは、もうすぐです。(青)

### ☆12月各部署ご提供PC☆

医学部33台	情報理工学系研究科22台	農学部12台
先端科学技術研究センター6台	附属図書館5台	教養学部3台
薬学部2台	本部2台	文学部2台
		経済学部1台

以上88台のノートPCは2回目の募集に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしく願いいたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス (本部資産経営G内)  
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp  
URL: http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/  
内線: 22135 (担当 青木・高橋)
- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部  
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)  
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

# インタープリターズ・バイブル vol. 30



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

## 真の仕分け作業の意味

渡邊雄一郎

総合文化研究科 教授

科学技術インタープリター養成プログラム執行委員

2010年度予算編成に先んじて、要求項目の吟味が新政権のもとで行われ、俗にいう仕分け作業が注目を集めたのは記憶に新しい。その公開のやりとりの場を、マスコミを通じて国民は見たわけだが、そこでは科学技術、研究に関わるものも狙いの鯉となった。多くの霞ヶ関のお役人が衆目にさらされ、一種の裁判のような場に引っ張り出された印象をもった。ある晩、テレビの夜のニュースをみると、なんと私の出身研究室の先輩が文部科学省関係の案件でその場に登場した(引っ張り出されていた)のである。先輩は修士課程を卒業して、公務員試験に合格のち科学技術省に入り、今は文部科学省のお役人となっている。かねてから科学行政について担当していますと、同窓会のたびに話をきいていた。私はその先輩が仕分けの作業の場にている場面をまさにテレビの液晶をとおして見たのである。今回その特定のやりとりについては物を申すまい。ただ、大学の人間、理系の出身だからといって政治と混じることはないと思っている人がおおいだろうが、これから日本でもそんな棲み分けはなくなるのではないかと感じたのである。すくなくとも、科学者あるいは科学関係者が全員といわずとも、ある程度の人が政治家とだけでなく、広く社会と対話をしていく必要性が大いに増えることが現実のこととなったと感じたのである。

われわれ研究室にいて、その運営上研究費を外部から得る必要がある。その際に、いろいろな研究費予算の枠に対して、自らの研究を提案して認めてもらおうとする。そのとき姿は見えないがピアレビューする人として想定してきたのは、同業者(つまり研究者のだけか)、シニアな研究者、あるいはせいぜい科学行政のお役人であった。ところがその研究費枠を担保している行政レベルでの予算枠自体が、厳しい評価にあったのである。かつてなかった事態に、この仕分け作業で厳しい評価を受けた予算関係者は一斉に反論をした。反論は当然であるが、その仕方にもいろいろと個性を見た。既得権を守るような説得力を持たないだろう。仕分けの見直しが反論メールの数の勝負となるというのも変な話である。どのように重要かということはどう一般の方に説明するか。理系出身者もこれから将来姿やあり方も変わっていくのであろう。研究一辺倒という人も当然残るであろうが、あたらしい姿、存在の仕方もある気がした。それがどのような姿、位置づけなのかを考えていくことが重要だと感じた2010年の年明けである。

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL: http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

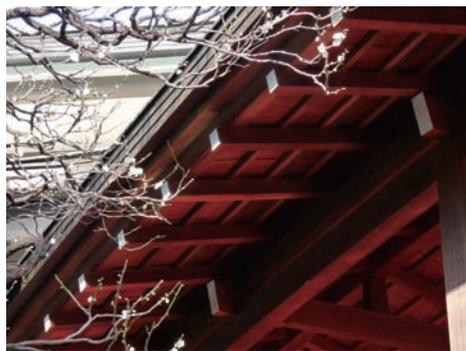
Happy New Year

# 寅 2010

政策ビジョン研究センターでは昨年、設立1周年を迎え、下記の提言・方向性を発表しました。皆さまのご支援、ご協力に心より感謝申し上げます。

- 日米欧三極知財シンポジウムへのアカデミアからの提言 2009/11
- 未来を創造する特許制度のための15の提言 2009/06
- 社会が選択するエネルギー・環境政策 2009/07
- 安心して暮らせる活力ある長寿社会の実現 2009/02

※詳細はHPをご覧ください。



## 日仏合作グライダー

### 100年記念講演会式典開催

当センター航空政策研究ユニットの主要メンバーである航空イノベーション総括寄付講座(CAIR)が事務局となり、100年前に日仏の3名の協力を実現した日本初のグライダーの飛行を記念して、12月9日(水)東京大学、在日フランス大使館等の共催により、安田講堂において記念講演会と式典が開催されました。

開催報告は本誌20ページに掲載されている通りですが、航空機開発、航空輸送、空港問題など、日本の航空は大きな転換期にあります。自由に空を飛ぶ航空は元々国際的であり、その開発製造も、解決すべき課題もグローバル化しています。この企画が、当時の日仏の協力とその後の関係が思い起こされ、国際的な連携で新たな航空イノベーションを実現する契機になることを願っています。



1. 関係者を交えて当時の様子と将来への展望が語られました。(撮影、酒井徹也)
2. 学生の手で再現されたグライダー模型。(撮影、Ken Friedl)
3. ダッソー・システムズ(株)の協力により動画として甦った100年前の不忍池での飛行。注)CGと模型はリチャード・アンセル氏のイラストを参考に製作されました。

#### インフォメーション

### クリニカルデータ国際シンポジウム ～データ記録・保存から分析・再利用へ～

平成13年12月26日に保健医療分野の情報化にむけてのグランドデザインが策定されてから、8年が過ぎました。この間、医療機関における情報化は進み、多くの診療情報が電子保存されました。また、少子高齢化がますます進む一方で、100年に一度という大不況が訪れ、医療にかかる財源不足が周知のこととなりました。

我が国の医療は、右肩上がりの成長経済を背景に、十分な財源と質の高い医療従事者の養成により、WHOの評価でも世界最高水準にあるとされてきました。しかし、近年、産科小児科や救急医療問題など医療崩壊と呼ばれる課題も明らかになってきました。いわば、医療システムの病期は、第一期の財源確保の問題から第二期の医療提供体制の問題へと進行しつつあります。そこで、豊富に蓄積されつつあるにもかかわらず上手に使われていない電子化診療情報(クリニカルデータ)を活用することで、医療の効率化や安全性の向上、エビデンスに基づいた研究開発や医療政

策決定への応用などが期待されています。

本シンポジウムでは、まず、イギリスのNHSにおけるデータ解析や米国オバマ政権下での医療IT化政策、我が国のDPCのデータ利用等を紹介いただくとともに、最新のIT研究やEUにおける個人情報保護の問題をご報告していただけます。その上で、個人情報を保護した上でのクリニカルデータの利活用について、各界の識者の方々に議論いただくパネルディスカッションも実施することと致しました。

欧米や我が国の最先端の研究者や各界の方々の英知を合わせることで、「医療崩壊を救う処方箋」ができることを期待しております。

医療界に限らず、幅広い分野の方々のご参加をお待ちしております。

日時：3月5日(金) 13:00～18:30

場所：鉄門記念講堂(収容人数：300名程度)

#### ちょっと一言

1月1日に、日経新聞一面トップ「ニッポン復活の10年／『長寿』誇れる国家モデルを」の特集記事で掲載されました。新年早々の好スタートに感謝しています。

「高齢者に焦点をあてた社会制度とビジネスモデルを確立し、アジアが追随するような戦略を描く時」と東大政策ビジョン研究センター長の森田朗(日経新聞記事より引用)

とのこと。当センターが昨年、一番最初に手掛けたテーマ(この連載の創刊号も高齢社会がテーマでしたが)、このような形で取り上げられ、感慨ひとしおです。今後とも同テーマには力を入れて取り組んでいく予定です。ご期待ください。

## INTERVIEW

「食と生命」総括寄付講座  
代表 佐藤 隆一郎 教授  
(大学院農学生命科学研究科)

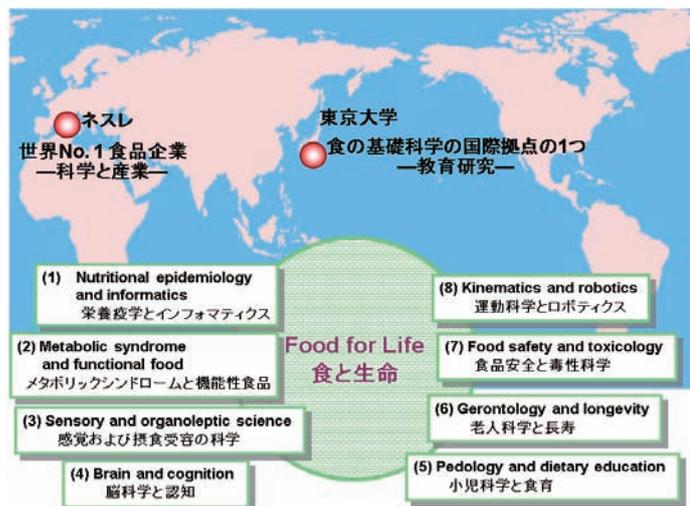
今回、ご紹介するのは、平成21年6月に設置された「食と生命」総括寄付講座です。日本をはじめ、世界の先進諸国において「人口の急速な高齢化」は重要な社会問題になっています。このような中で東京大学と世界最大手の食品企業の一つであるネスレ(Nestle)は、すべての年齢・ライフステージの人々における“Quality of Life”向上を目的に、メタボリックシンドロームからヘルシー・エイジング(健康的な加齢)といった多岐に亘るテーマに取り組むべく、「食と生命」に関する国際共同研究を開始しました。そこで、現在までの状況や今後の活動について、代表である佐藤隆一郎教授にお話を伺ってきました。

### Q. 発足の背景は？

佐藤 「食」に関する研究は、農学部農芸化学科(当時)において鈴木梅太郎先生が世界に先駆けてビタミンの存在を明らかにしたことから、本学で発展してきました。さらに1990年代に入ると、食品には栄養面での効果の他に、生理的機能(生体制御・防御)があるという新たな概念が本学を中心とした食品科学研究者から提唱され、今日この概念は欧米にも定着しつつあり、特にヨーロッパでは益々関心を集めるようになりました。

鈴木先生のご活躍から100年間、この学術領域において世界をリードしてきた日本と、この研究分野において多大な影響を与えてきた東京大学を、食品業界世界ナンバー1企業であるネスレが世界的規模で研究・企業展開する上で最も重要なパートナーとしてお選びいただいたのだと思います。

このような経緯で東大に寄附を頂き、共同でプロジェクトを起こすことになりました。本寄付講座は、農学生命科学研究科を拠点としつつも、医・工・理・薬・新領域を含めた多領域の横断体制で、「全東大発」の独創的研究・教育成果を世界に示すことを目指しています。



### Q. 主な研究内容は？

佐藤 本寄付講座では、(1)栄養疫学とインフォマティクス、(2)メタボリックシンドロームと機能性食品、(3)感覚および摂食受容の科学、(4)脳科学と認知、(5)小児科学と食育、(6)老人科学と長寿、(7)食品安全と毒性科学、(8)運動科学とロボティクス、の8つのプラットフォームを想定しており、健康と栄養の様々なテーマに取り組んでいます。このようにテーマが多岐に亘っていますので、広範な科学の知識と高い専門性を持つ研究者が参加出来るよう計画していく予定です。また、農学生命科学研究科の協力講座として、本寄付講座の専任

## 総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。  
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

教員である加藤特任教授が中心となって学生への指導等を行っております。

### Q. 苦勞した点は？

佐藤 初めての国際共同研究ということで、日本の大学の現状や寄付講座の状況というものが正確に伝わらず、当初は意思疎通がうまく出来ませんでした。契約一つにしても非常に苦勞しましたが、東大の執行部や産学連携本部の方々の大変な努力のおかげで、ネスレ側にもこちらの意図を分かって頂くことが出来ました。また、今、困っていることの一つが「円高」です。全ての資金をスイスフランで頂いていますので、円高によって金額が少なくなってしまう。今後は外部資金獲得も視野に入れ、研究活動を続けていく予定です。



「食と生命」総括寄付講座代表 佐藤隆一郎教授

### Q. 今後の予定は？

佐藤 一般向けの公開講座やシンポジウムなどを計画していきたいと思っています。分野がある程度限られたものから分野全体に関わる大きなものまで、開催していく必要があります。今のところ、具体的なことは決まっていますが、積極的にアウトリーチ活動をしていきます。また、「食」は生命の根幹であり、あらゆる分野に関係しているので、他部局との連携も進めていきます。特にネスレは老人科学に興味を持っていますので、高齢社会総合研究機構と共同研究の形で展開します。現在、弥生キャンパス敷地内にフードサイエンス棟の建築が進んでおり、2010年11月には完成する予定です。完成後には本寄付講座は同棟に入居しますので、充実した環境の下、ネスレと共に「食と生命」の基礎研究をより一層推進することが可能となり、今後、さらなる成果が期待出来ます。

### Q. 読者にメッセージをお願いします。

佐藤 まず今回の広報を通じて、東大が「食」の研究に大がかりに取り組んでいるということを知って頂ければと思います。そして「食」



を科学的に追究していくことに興味がある方は、ぜひ研究室にいらしてください。近々ホームページを開設する予定なので、活動内容やイベントなどをチェックして頂けたらと思います。

(インタビュー：鈴木、長田)

左から：ネスレリサーチ東京 ファブリチオ アリゴニ 所長、  
「食と生命」総括寄付講座 佐藤 隆一郎 代表、加藤 久典 特任教授

### ● 関連ホームページ ●

総括プロジェクト機構: <http://www.dpc.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ (内線21385)

Crossroad:  
 交差道路や、道が交差するところにある  
 集会場を意味します。産業界と研究  
 者のクロスする場所の意味をこめます。

## 「観光」をキーワードに地域の活性化を考える 東京大学地域振興研究会 平成21年度総会が開催されました



写真左: 影山本部長を囲む歴代TLFのみなさん。  
 写真中央: 基調講演をされた西村教授(先端科学  
 技術研究センター)。写真右: 講演をされた太田  
 講師(生産技術研究所)。

12月7日(月)産学連携本部2Fにて、東京大学地域振興研究会平成21年度総会が開催されました。同研究会は、テクノロジー・リエゾン・フェロー(TLF)を中核とする全国各地の地方公共団体関係者と東京大学とのネットワークを強化し、東京大学の研究成果を広く活用して地域振興に貢献する目的で、昨年の12月に発足したものです。

2回目の開催にあたる今回は、「観光と地域振興」をキーワードとし、西村幸夫教授(先端科学技術研究センター)および太田浩史講師(生産技術研究所)による講演と、TLF修了生による3自治体の事例・調査報告をもとに討論が行われました。西村教授の基調講演では、「観光まちづくり」の新しいコンセプトとその実例として、世界遺産に登録された石見銀山の成功例が、多くの画像とともに紹介されました。太田講師からは、炭鉱都市から衰退した英国ニューキャッスル/ゲーツヘッドが、街をあげた文化プログラムの展開によって観光地として再興し、大きな経済的効果をもたらした例が提示されました。

各自治体の報告で、愛知県(TLF第7期生の清水彰子氏)からは「信長ツアー」や「信長膳」の販売などユニークな「武将観光」の取り組みが、熊本県(第9期生の林田安生氏)からは、九州新幹線全線開業へ向けた観光立県推進計画の具体例として、阿蘇地方へさらに多くの観光客を呼び込む工夫等が、また沖縄県(9期生の眞武信一氏)からは、沖縄滞在中の観光客へ「食」を提供し、食体験からリピーターを増やす観光と農林水産業を一体化した取り組み等が紹介されました。

今回の総会は「地域の振興」を共通の目的として各地の自治体関係者と東京大学教員が集まり、具体的なテーマのもとで議論する新しいしくみの研究会として、成功裏に終わりました。

**産学連携プラザ  
 インキュベーション  
 ルームの入居企業  
 を募集します!**

産学連携プラザイン  
 キュベーションルー  
 ムにて入居企業を募  
 集中です( <http://www.ducr.utokyo.ac.jp/kigyuu/incubation> )。  
 起業をお考えの研究  
 者の方は、産学連携  
 本部事業化推進部  
 (seed@ducr.u-tokyo.  
 ac.jp)までご連絡くだ  
 さい。



産学連携本部のインキュベ  
 ーション事業は、他にアントレ  
 プレナープラザ(写真)と、駒場  
 連携研究棟インキュベシ  
 ョンルームがあります。

## Column 東大発ベンチャー企業におじゃましま〜す!

産学連携本部の大学発ベンチャー支援施設に入居されているベンチャー企業を紹介するコーナー。第3回目は、本郷キャンパスアントレプレナープラザに入居している株式会社リッテルを訪問しました。

**株式会社リッテル** A Total Search Solution for Information Literacy

代表取締役社長: 和田憲治  
 本社: 東京大学本郷キャンパス アントレプレナープラザ4F  
 設立: 2007年4月 資本金: 8,610万円 <http://www.littel.co.jp/>  
 事業内容: WEBソフトウェア製品の開発・販売。ソリューション提供など

アントレプレナープラザ4Fにある株式会社リッテル本社を訪れると、会議室スペースに大きなモニターがありました。自社のWEBソフトウェアの紹介をするときは、モニターに検索システムを映し出し、実際に使ってもらいながら説明をするそうです。

株式会社リッテルは、東京大学情報基盤センター学術情報研究部門で研究されてきた自然言語処理に関する技術(テキストマイニング)を使い、WEBソフトウェアを製品化しています。製品には、図書館利用をナビゲートする「図書館レファレンス支援サービス(ASPサービス)」や、こだわり検索ができる「WEBサイト内最適化検索ツール」など、独創的なサービスシステムがあります。研究開発を手がけた清田陽司助教(情報基盤センター)は「自分が研究・開発してきた技術が実用化され、困っていた方たちへ提供できたことは大変うれしいです。これからも利用者の情報リテラシーを高めるためのサポートは、惜しまずしていきたいと思っています」と述べられました。

和田憲治社長には「研究の成果を一般に広めていくという当社のミッションを忘れず、大企業の下請けになることなく、オンリーワン企業をめざします」とお話しいただきました。



和田憲治社長(上段右から4番目)と、技術開発者の清田陽司助教(上段右から2番目)を囲む株式会社リッテルのみなさん

連絡先: 産学連携本部(本部産学連携グループ)  
 電話: 内線22857(外線03-5841-2857)  
 WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

**DUCR**  
 Division of University Corporate Relations  
 The University of Tokyo

## ワタシのオシゴト / 第47回

Rings around the UT

大学院総合文化研究科・教養学部等総務課 副課長

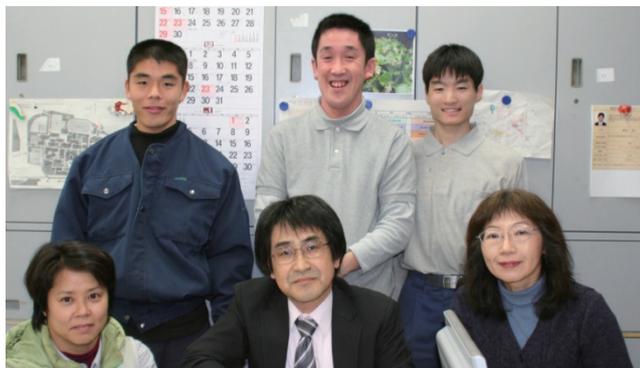
茅根 修さん

勤続28年目。  
初めて感じた教養学部の大きさ

障害者雇用の推進で発足した環境美化チームが作成した花壇にて

「教養学部等総務課副課長」これが、私の正式な職名です。教養学部等総務課には、総務、広報・情報、人事、職員の4つの係と環境美化チームがあり、これらの係等の調整を行うことが私の主な仕事ですが、その他にも、学科事務担当の専門員および大学院数理科学研究科担当の副課長（どちらも総務課所属）との連絡調整も重要な仕事となっています。敷地面積・約254,500㎡、教職員等・約1,800人、学部学生・約7,000人、大学院学生・約1,400人、これが総合文化研究科・教養学部の大まかな規模です。この組織の総務課副課長として、2008年7月に着任しましたが、一部局としての規模の大きさだけでなく、毎日のように起こる様々な事柄に驚きの日々を送っています。

本郷では感じられない、高校を卒業したばかりの初々しい学生達の雰囲気、駒場での仕事を経験したことの無い皆さん！機会があれば是非一度経験してみてください。



環境美化チームのメンバーと

得意ワザ：身の軽さ（体重的なものじゃなくて）  
自分の性格：典型的なプラス思考  
次回執筆のご指名：井上幸太郎さん  
次回執筆との関係：明るい職場作り推進委員会会長と会員  
次回執筆の紹介：一見怖そうだがとてもやさしい元上司

## コミュニケーションセンターだより No.64

## ■黄金の絨毯（12月初旬～中旬）



ようやく12月になり銀杏が黄金色に色づきました。あまりにも見事だったのでここに一枚。お散歩のお客様も多くUTCCも大変賑わいました。

紅葉というと11月のイメージなのですが意外に遅く、クリスマスと重なり不思議な気分でした。

それにしても東大の銀杏並木は本当に素晴らしく毎年息をのんでしまいます。すぐに散ってしまうのが寂しいですが、来年の色づきが今から待ち遠しいですね！！

## ■クリスマスイルミネーション（12月中旬～12月下旬）



銀杏の葉も散り、本格的に冬が始まりましたね。

さて、今年も秩父演習林の方からもみの木を譲って頂きました。

「ウラジロモミノキ」という名前だそうです、確かに葉の裏が少し白くなっています。

とても可愛いツリーですので来年は皆さんもぜひ見に来て下さい。毎年店内もクリスマスソングで盛り上がっております♪

## ■UTCCスタッフおすすめ商品のご紹介！！



はじめましてこんにちは。  
UTCCスタッフの石指です。  
今回僕のお薦めする商品は「フォトモザイクマウスパッド（赤門）」です。いまや皆様の生活になくはならないマウスパッドですが、こちらの商品、一見ただの写真のようですがよく見ると・・・フォトモザイクで出来ているのです！！

機能性と美を合わせもつこのフォトモザイクマウスパッド。是非お手元に置いてみてはいかがでしょうか。

工学系研究科  
社会基盤学専攻 修士1年  
石指 裕章

■フォトモザイクマウスパッド  
735円（税込）

（担当：コミュニケーションセンター 山下）



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター  
The University of Tokyo  
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



## ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～



### 東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



### イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
  - mail@utnav.jp宛てにメール送信
  - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



### イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
  - イベント掲載フォームから送信！
  - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823
  - メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
  - オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室

噴

水



### 医学部本館とロータリーの電飾

2003年から恒例になっている医学部2・3・4年生による医学部2号館およびロータリーのイルミネーションが12月20日(日)から1月9日(土)の17時から23時まで行われました。2009年度は3年生の江上尚子さんが代表で、12月19日(土)・20日(日)の2日間で集中して設置を行いました。初日は12個のコードリールドラムで大きな配線を行い、2日目にライトの設置と防水処置を施しました。2003年から使用している電球やLEDは年々破損が進行するため、毎年、医学部の各教室に寄附を募って、今年も新たにLEDやコードリールドラムなどを購入しました。今年度の新たな企画はロータリー内に角材をポールにしたツリーの設置と渦巻きベンチへのカラフルライトの化粧でした(写真上)。医学部教育研究棟の12階から見下ろすとポールと椅子を目玉にしたスマイルマークが出来上がっていました(写真左下)。今年度、新たに建立された医学部設立150周年のモニュメントも中庭の隅の方でLEDに白く飾られていました(写真右下)。例年、試験の合間を縫っての設営になるので、作業開始時に人の集まりが悪かったのですが、作業終了時や、記念撮影時には大勢の学生が集合しました。期間中、突風でタイマーのスイッチがオフになり、屋上と中2階の電飾が切れたのが残念でした。1月11日(月・祝)に取り外し作業を行い、新たに購入した衣装ケースにLED等を収納し地下倉庫に片付けました。毎年快くご理解いただき、ご寄附賜った医学部各教室の皆様ならびに、設営・設置作業にご協力いただきました医学部教職員・防災センター等の方々には厚く御礼申し上げます。



(写真上) 電飾されたベンチとツリー、(写真左下) 電飾されたロータリーのスマイルマーク (写真右下) 電飾の全景、本館、ロータリーとモニュメント

(大学院医学系研究科・医学部 中嶋信)

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

トランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ

東京大学 G-COE 「学融合に基づく医療システムイノベーション」シンポジウム  
CMSI Annual Symposium 2010

当拠点では、2月24日(水)に年次シンポジウム「CMSI Annual Symposium 2010」を開催いたします。拠点の設立から1年半を経た今回のシンポジウムでは、CMSIの教育活動について、リサーチアシスタント(RA)による「サマーインターンシップ」「リトリート」「ケーススタディ」の今年度の成果をご紹介します。

また、招待講演者としてベルン大学 Nolte 教授、テキサス大学 Bogler 教授をお迎えし、バイオメディカルエンジニアリングにおける最新の研究をご講演いただくこととなりました。

ぜひ、多くの皆様にご臨席いただければと存じます。プログラムをご覧の上、ご検討いただけますようお願い申し上げます。

### CMSI Annual Symposium 2010

**Date:** Wednesday, February 24, 2010

**Venue:** The Iron Gate Memorial Hall

(14th Floor, Faculty of Medicine Experimental Research  
Bldg. Hongo Campus)

**Language:** English

### PROGRAM

12:30	Registration
13:00-13:10	<b>Opening Remarks</b> <b>Kazunori Kataoka</b> Leader, Professor, Dept. of Materials Engineering / Dept. of Bioengineering, Graduate School of Engineering

Division of Clinical Biotechnology, Center for Disease Biology and Integrative Medicine, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

13:10-13:30 **Guest speakers**

13:30-14:20 **Plenary Lecture 1**

**Lutz Nolte**

Professor, Institute for Surgical Technology and Biomechanics, University of Bern, Switzerland

*“Sensors for Orthopaedic Interventions”*

14:20-15:10 **Plenary Lecture 2**

**Oliver Bogler**

Professor, Dept. of Neurosurgery and Neuro-Oncology & Brain, Tumor Center and Dept. of Biostatistics, The University of Texas M.D. Anderson Cancer Center, USA

*“Analysis of aberrant EGFR signaling in glioma with mass spectrometry-based phosphoproteomics”*

15:10-15:30 Coffee Break

15:30-16:30 **CMSI Curriculum Overview :  
Summer Internship Program**

**Keiji Itaka**, Associate Professor, Division of Clinical Biotechnology, Center for Disease Biology and Integrative Medicine, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

16:30-17:30 **CMSI Curriculum Overview :  
Retreat**

**Kensuke Osada**, Associate Professor, Dept. of Materials Engineering, Graduate School of Engineering, The University of Tokyo

17:30-18:20 **CMSI Curriculum Overview :  
Case Studies**

**Tomohiro Anzai**, Associate Professor, Pharmaco-Business Innovation, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokyo

18:20-18:30 **Presentation of Certificate of Attendance -  
Prof. Kazunori Kataoka**

18:30-18:45 **Closing Remarks**

19:00-20:30 Reception Dinner at “Capo Pellicano”  
13th Fl. Faculty of Medicine, Experimental Research Bldg.

## 【お問合せ】

東京大学 G-COE「学融合に基づく医療システムイノベーション」事務局  
電話 03-5841-8446 (内線 28446)

## 【お申し込み・プログラム】

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CMSI/event/index.html#sympo>

シンポジウム・講演会

サステナビリティ学連携研究機構

国際生物多様性年記念 サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) 国際シンポジウム「生物多様性とサステナビリティー自然と調和した社会をつくる」開催のお知らせ

サステナビリティ学連携研究機構では、以下のとおり国際生物多様性年記念 サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) 国際シンポジウム「生物多様性とサステナビリティー自然と調和した社会をつくる」を開催します。多くの方のご来場をお待ちしています。

■日時：2月27日(土) 13:30～17:00

■会場：安田講堂

■主催：サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)

共催：生物多様性条約事務局

協賛：日本経済新聞社

後援：環境省、国際連合大学サステナビリティと平和研究所・高等研究所、日本経済団体連合自然保護協議会、日本生態学会、日本造園学会、IUCN 日本委員会、WWF ジャパン

■入場無料、同時通訳付き



2010年は国連の提唱する国際生物多様年にあたり、また愛知県名古屋市において生物多様性条約の第10回締約国会議 (COP10) が開催される年でもあります。COP10では世界の生物多様性と生態系を保全、管理、再生していくための長期的戦略が話し合われることに

なっています。この国際シンポジウムでは、そうした長期的戦略を考えるための前提となる、環境変動に対する生態系の回復力や、生態系のもつさまざまな恵み (生態系サービス) をどう評価し、自然と調和した持続可能な社会の構築にどう結びつけていくかについて、この分野の第一線でご活躍の方々に講演をいただきます。また、パネル討論では、日本の里地里山に見られるような伝統的に維持されてきた人間・自然関係を再評価し、現代の持続可能な社会システムとして再構築する方策など、具体的な生物多様性・生態系保全のあり方を多面的に検討します。

## <プログラム>

- 趣旨説明  
花木 啓祐  
(東京大学 IR3S 兼任教授・大学院工学系研究科教授)
- 開会挨拶  
濱田 純一 (東京大学総長・IR3S 機構長)
- 講演「変動する地球環境に生態系はどこまで耐えられるか」  
カール・フォルケ  
(ストックホルム大学ストックホルムレジリアンスセンター科学ディレクター、スウェーデン王立科学アカデミーバイエ生態経済学研究所所長)
- 講演「グローバル化時代の生物多様性と生態系の保全」  
ジェーン・スマート  
(国際自然保護連合 (IUCN) 生物多様性保全グループディレクター・種のプログラム代表)
- 講演「生物多様性条約の目標と国際生物多様性年の意義」  
アフメッド・ジョグラフィ  
(生物多様性条約 (CBD) 事務局長)
- 講演「里地里山と新たなコモンズの創造」  
武内 和彦  
(東京大学 IR3S 副機構長、国際連合大学副学長)
- パネル討論  
モデレーター：武内 和彦  
パネリスト：  
カール・フォルケ  
ジェーン・スマート  
アフメッド・ジョグラフィ  
鷺谷 いづみ  
(東京大学大学院農学生命科学研究科教授)  
黒田 大三郎 (環境省参与)  
あん・まくどなと (国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長)  
熊野 英介 (アマタ株式会社代表取締役社長)
- 閉会挨拶  
住 明正  
(東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ (TIGS) 統括ディレクター・教授)

## ■お申込み方法

IR3S ウェブサイト (<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>) からお申込みください。

## ■問い合わせ

研究機構等支援グループ 近、泉 (21387、20484)  
kikoushien@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# 募集

## 募集

本部学生支援グループ

### 平成 21 年度第 2 回「東京大学総長賞」の募集について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を修めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成 14 年度から設けられています。

この表彰は、「東京大学学生表彰選考委員会」（以下「選考委員会」という。）が選考にあたり、総長が表彰するものです。選考委員会では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものが決定されます。

**第 2 回（春）は学業を対象に募集し、推薦者は各学部長及び各研究科長・教育部の長のみ**となります。また、第 2 回（春）には年間の授与者の中から特に優秀な者に対し、総長大賞が授与される予定です。

## 記

1. 申請書類：別記様式 1（個人）又は別記様式 2（団体）に必要事項を記入し、参考資料等を添付してください。なお、選考時の参考とするので、推薦理由欄には推薦にあたって留意された点（所見等）や選考経過等についても併せて記入し、参考書類（写も可）を添付してください。また、専門分野にかかわらず、誰にでも理解しやすい表現にて記述願います。
2. 推薦基準：以下のとおりです。
3. 提出期限：3月5日（金）正午迄（必着）
4. 選考結果：3月中旬に推薦者及び受賞者へご連絡し

ます。

5. 授与式：3月24日（水）17時より小柴ホール（理学部1号館）にて実施を予定しています。

## 【本件に関する問い合わせ】

本部学生支援グループ学生生活チーム  
担当：山田・山形（内線：21205・22514）  
E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# お知らせ

## お知らせ

### 退職教員の最終講義

学内広報では、今年度末をもって本学を退職される方々の最終講義のお知らせを掲載します。

## 大学院工学系研究科・工学部

### 山地 憲治 教授

（電気系工学専攻）

日時：2月19日（金）15：00～16：30

会場：工学部2号館213号講義室

演題：「エネルギー政策研究の軌跡と到達点（仮題）」

### 難波 和彦 教授

（建築学専攻・建築計画学講座）

日時：2月20日（土）13：30～15：30

会場：工学部1号館15号教室

演題：「建築の4層構造—教育・研究・デザイン」

### 岡 芳明 教授

（原子力専攻・原子炉工学講座）

日時：3月2日（火）15：00～17：00

会場：武田ホール

演題：「原子力の研究教育プロジェクト」

### 市川 昌和 教授

（物理工学専攻・物理工学講座）

日時：3月3日（水）16：00～17：30

会場：工学部6号館2階 63号講義室

演題：「電子線と物質の相互作用の研究と応用」

## 大学院理学系研究科・理学部

### 野津 憲治 教授

(附属地殻化学実験施設)

日時：3月23日(火) 14:30～16:30

会場：小柴ホール

演題：「百歳を迎える地球化学：共に歩んだ四十年間の進展」

## 大学院農学生命科学研究科・農学部

### 阿部 啓子 教授

(応用生命化学専攻・生物機能化学講座・生物機能開発化学研究室)

日時：3月5日(金) 15:00～17:00

会場：弥生講堂・一条ホール

演題：「食品科学研究の新基盤—化学と生物のインタープレー」

### 空閑 重則 教授

(生物材料科学専攻・生物素材科学講座・生物素材科学研究室)

日時：3月10日(水) 16:00～18:00

会場：弥生講堂・一条ホール

演題：「セルロース - 高分子 - ナノ材料」

## 大学院総合文化研究科・教養学部

### 下井 守 教授

(広域科学専攻・相関基礎科学系)

日時：3月5日(金) 14:30～16:00

会場：18号館ホール

演題：「ホウ素とともに三十年」

### 森田 昭雄 准教授

(広域科学専攻・相関基礎科学系)

日時：3月5日(金) 13:00～14:30

会場：18号館ホール

演題：「シュレーディンガー方程式の微笑」

### 須藤 和夫 教授

(広域科学専攻・生命環境科学系)

日時：3月11日(木) 15:00～17:00

会場：アドミニストレーション棟3階 学際交流ホール

演題：「分子機械としてのタンパク質モーターの構造・機能・進化」

### 菅原 正 教授

(広域科学専攻・相関基礎科学系)

日時：3月19日(金) 15:00～17:00

会場：アドミニストレーション棟3階 学際交流ホール

演題：「分子で紡ぐシナリオ — 生命システムまでの30年の道程—」

## 大学院教育学研究科・教育学部

### 衛藤 隆 教授

(身体教育学コース・健康教育学分野)

日時：3月20日(土) 16:00～17:30

会場：椿山荘1階ペガサス(文京区関口2-10-8)

演題：「子どもの健康—肝炎予防から健康と安全の推進へ」

## 大学院薬学系研究科・薬学部

### 佐藤 能雅 教授

(機能薬学専攻)

日時：3月8日(月) 14:00～16:00

会場：薬学系総合研究棟2階 講堂

演題：「蛋白質の三次元構造とX線解析」

### 柴崎 正勝 教授

(有機合成化学教室)

日時：3月12日(金) 13:00～15:30

会場：薬学系研究科総合研究棟2階 講堂、南館南講義室(モニター中継)、西館西講義室(モニター中継)

演題：「21世紀の医薬品合成」

## 大学院新領域創成科学研究科

### 鳥海 光弘 教授

(複雑理工学専攻)

日時：3月10日(水) 15:30～17:00

会場：柏キャンパス基盤棟大講義室

演題：「地球内部のレオロジーと変成作用」

## 物性研究所

### 渡部 俊太郎 教授

(先端分光研究部門)

日時：3月4日(木) 15:20～17:25

会場：物性研究所本館6階 大講義室(柏キャンパス)

演題：「極限レーザーとの歩み」

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 「教養学部報」第526（1月6日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第526号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

北林かや：手話学研究的未来に向けて

～日本手話学会研究大会報告～

旭 英昭：東京大学・世界銀行グループ共催

HSP シンポジウムの開催について

遠藤 貢：旭英昭先生を送る

若林正文：駒場への感謝

〈駒場をあとに・おくることば〉

神野志隆光：教えることの「楽しさ」

品田悦一：僕等の親分——神野志隆光教授を送る

森田昭雄：ムーヴィング

増田 茂：森田昭雄先生を送る

丹羽 清：理工学と経営学との融合「技術経営学」：

広域科学科での研究と教育を顧みて

植田一博：丹羽先生をおくる

下井 守：年貢の納め時

河野泰朗：下井先生を送る

菅原 正：私を導いてくれた分子達、仲間達

遠藤泰樹：菅原正先生を送る

柴 宜弘：ユーゴの解体、紛争とともに歩んだ一八年

井坂理穂：柴宜弘先生を送る

〈時に沿って〉

坂本さやか：ミシュレと一号館の「精霊」

千野謙太郎：“ソフトじゃないボール”に出会って

松前もゆる：二十年を思う

「東欧地域研究の現在、そして未来への展望」のお知らせ（1/9）

## お知らせ

情報基盤センター

### 春休み“情報探索ガイダンス”のご案内

来年度に向けて、卒論・修論の準備をぼちぼち始めてみませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを開催しています。

実習を交えた、わかりやすい説明で好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

#### ●日程・コース概要：

##### ■2/2（火）16：00～17：30

Webで文献の「検索」から「整理」まで

～Web of Science（45分）+ EndNote Web（45分）

Web of Scienceは、全分野の主要学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワード検索に加え、引用文献を手がかりとした検索も可能です。

後半は、Web上で使える文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を実習します。

どちらか一方のみの参加もOKです。

##### ■2/4（木）12：10～12：40

国内の新聞記事を探すには？（30分のクイック講習会）

朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の記事の探し方をまとめてコンパクトにご紹介します。

##### ■2/5（金）13：30～14：30 日本の論文を探すには？

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」（サイニイ）の使い方を中心に解説します。

##### ■2/9（火）16：00～17：10

Webで文献の「検索」から「整理」まで

～PubMed（25分）+ RefWorks（45分）～

医学系文献データベース「PubMed」の基本的な検索方法から検索結果の「RefWorks」への取り込み、文献リストの自動生成などを実習します。

どちらか一方のみの参加もOKです。

##### ■2/10（水）12：10～12：30

自宅から検索するには？（20分のワンポイント講習会）

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■2/12 (金) 16:00 ~ 17:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに実習します。

■2/18 (木) 12:10 ~ 12:40

電子ジャーナルで論文を入手 (30分のクイック講習会)

電子ジャーナル等で目的の雑誌論文を入手する方法をコンパクトに解説します。

■2/24 (水) 16:00 ~ 17:00

文献リストをサクッと作成～RefWorksを使うには～  
Web上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

●会場:

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー

●参加費: 無料

●予約不要

各回先着12名。直接ご来場ください。

●オーダーメイドの講習会なら、希望にあわせて講習内容をカスタマイズ。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。既成の講習会では物足りない、という方にお奨めです。

卒論指導や進学予定者のガイダンスなど、授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記までご連絡ください。(無料)

下記サイトをご参照ください。

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>

●データベースや講習会情報を見逃さないために。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行のLitetopi (リテトピ) メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記までメールでご連絡ください。(無料)

●お問い合わせ:

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線: 22649)

[literacy@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



月	火	水	木	金
2/1	2/2 16:00 ~ 17:30 WOS + EndNote Web	2/3	2/4 12:10 ~ 12:40 国内の新聞記事	2/5 13:30 ~ 14:30 日本の論文
2/8	2/9 16:00 ~ 17:10 PubMed + RefWorks	2/10 12:10 ~ 12:30 自宅から	2/11	2/12 16:00 ~ 17:00 早わかり
2/15	2/16	2/17	2/18 12:10 ~ 12:40 電子ジャーナル	2/19
2/22	2/23	2/24 16:00 ~ 17:00 RefWorks	2/25	2/26

お知らせ

医学部附属病院

「第5回 22世紀医療センターシンポジウム」  
医療ニーズと産官学・国民の連携  
22世紀に向けた学融合の拠点-挑戦と展望-

医学部附属病院 22世紀医療センターでは、「第5回 22世紀医療センターシンポジウム」を開催いたします。「医療ニーズと産官学・国民の連携 22世紀に向けた学融合の拠点-挑戦と展望-」をテーマに当センターで行われてきた産学連携に基づく活動成果のご報告と今後の方向性について広く議論を行いたいと考えております。

活動報告では、各講座、特に産学連携の成果としての視点からのプレゼンテーションや、先端医療研究センター (附属病院内) として臨床医学研究の成果を社会に送り出すトランスレーショナルリサーチの進捗状況と、それを支援する東京大学の環境などについてご報告いたします。

トランスレーショナルリサーチセンター 永井良三センター長、(独) 医薬品医療機器総合機構 近藤達也理事長の特別講演、ポスター発表とパネルディスカッションで構成し、22世紀医療センターが、産官学連携による

最先端の臨床医学研究の場として発展し、その活動の成果を速やかに社会に還元するために、今後の進むべき方向性について参加者の皆様とともに議論を深めたいと期待しております。

日時： 2月12日（金） 13:00～18:00  
会場： 医学部教育研究棟 鉄門記念講堂  
参加費： 無料（定員270名 事前登録制）  
懇親会 5,000円（当日受付支払い）  
主催： 医学部附属病院 22世紀医療センター  
共催： 東京大学グローバルCOE「学融合に基づく医療システムイノベーション」

プログラム：

- ・特別講演（1）「これからの臨床医学研究」  
永井良三 トランスレーショナルリサーチセンター長
- ・特別講演（2）「世界を軸とするPMDA」  
近藤達也（独）医薬品医療機器総合機構 理事長
- ・基調報告
- ・ポスター発表
- ・パネルディスカッション

#### 【お問合せ】

東京大学医学部附属病院  
22世紀医療センターシンポジウム 実行委員会事務局  
電話 03-3815-5411（内線32465）

#### 【お申し込み・プログラム】

インターネット、ファックスによるお申し込み、プログラム  
<http://www.h.u-tokyo.ac.jp/news/news.php?newsid=574>  
※「東京大学附属病院」で検索してください

E-mailでのお申し込み

宛先：22c-symposium@adm.h.u-tokyo.ac.jp  
ご所属の機関・企業名、住所、氏名、E-mailアドレス、FAX番号、懇親会への参加希望（参加・不参加）をお書きの上、上記のアドレスまでお送り下さい。

#### お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

#### 技術職員研修会開催のお知らせ

第2回農学生命科学研究科技術職員研修会が下記の通り開催されます。技術職員の新たな研修制度を模索する中、昨年に引き続き当研究科主催で実施致します。技術職員に限らず、教員・事務職員・学生、どなたでも参加できます。当日受付も可能です。多くの方の参加をお待ちしております。

日時： 3月4日（木）13:00～3月5日（金）12:00

会場： 弥生講堂アネックスセイホクギャラリー

内容：

3月4日（木）  
13:00 開会  
13:10 技術職員発表  
16:00 特別講演「ハラスメントおよびメンタルヘルスについて」  
ハラスメント相談所 矢野ゆき 専門員  
環境安全本部産業医 古澤真美 助教  
17:30 懇親会

3月5日（金）

9:00 技術職員ポスター発表  
10:00 研究科長挨拶  
10:15 閉会挨拶  
10:30 弥生地区の施設見学  
12:00 閉会

受付は3月4日（木）12:00から

お問合せ先：附属農場 久保田浩史

Tel: 070-6442-9482

E-mail: cbx@fm.a.u-tokyo.ac.jp

## 平成21年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日	配布
1396	1月29日(金)	2月19日(金)	2月25日(木)
1397	2月25日(木)	3月19日(金)	3月26日(金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)

【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

#### 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム  
TEL: 03-3811-3393 内線22031  
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

	氏名	異動内容	旧（現）職等
(退職)			
21.12.31	渋谷 雅明	辞職	大学院薬学系研究科准教授
21.12.31	関野 祐子	辞職（国立医薬品食品衛生研究所安全性生物試験研究センター薬理部長）	医科学研究所准教授
21.12.31	西山 賢一	辞職（岩手大学農学部附属寒冷バイオフィロンティア研究センター教授）	分子細胞生物学研究所准教授
(採用)			
21.12.16	寺澤 敏夫	宇宙線研究所教授	東京工業大学大学院理工学研究科教授
22.1.1	岩佐 義宏	大学院工学系研究科附属量子相エレクトロニクス研究センター教授	東北大学金属材料研究所教授
22.1.1	杉本 和行	大学院公共政策学連携研究部教授	
22.1.1	清田 隆	生産技術研究所准教授	
22.1.1	狩野 泰則	海洋研究所准教授	宮崎大学農学部助教
(昇任)			
21.12.16	宇於崎 宏	大学院医学系研究科准教授	医学部講師
21.12.16	田中 純	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.1.1	浦野 泰照	大学院医学系研究科教授	大学院薬学系研究科准教授
22.1.1	石坂 香子	大学院工学系研究科准教授	物性研究所助教

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。  
 東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

= 特集テーマ&執筆部署募集告知 = 特集の記事を執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

① テーマの選定

全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。  
 まずは、本部広報グループに気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。  
 （締切日の1カ月前位までに一度ご相談ください）

② 内容・構成の決定

執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。  
 見開き2ページを1単位とし、内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。

③ 原稿の執筆

構成に合わせて原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はwordでご執筆下さい。

④ ビジュアル要素の提供

特集に盛り込む写真・図・イラストをご提供していただきます。

⑤ デザイン

原稿、写真・図等を素材にして、執筆部署または編集スタッフがページデザインを作ります。

⑥ 校正

主に文字校正を行なっていただきます。

⑦ 完成

刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

本部広報グループ 広報企画チーム TEL：03-3811-3393 内線22031 E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



# 「学内広報」ニュース・インフォメーション記事提出要領

## 作成例

本部広報グループ

「キャンパスツアー」スタート!

本学学生がツアーガイドとなって、赤門や大講堂(安田講堂)、三四郎池、総合図書館など、本郷キャンパス内の名所旧跡を案内する「キャンパスツアー」が今年も始まった。キャンパスツアーは昨年度から実施されており、「ジュニアTA制度」に基づき応募した学生が、東京大学の歴史や学生生活のエピソードを交えながら、約2時間にわたり案内する。

今年度のスタートとなった5月14日(土)には、午前、午後合わせて43人が参加し、ツアーガイドの説明に熱心に耳を傾けていた。



広報センター前で説明するガイドとそれを聞く参加者

ツアーには、高校生以上であれば誰でも無料で参加することができる。今後のツアーは、五月祭期間や年末年始、入試期間を除く授業期間の土曜日と日曜日(10:00~12:00、14:00~16:00)に行われる予定である。



正門から大講堂に続く銀杏並木

記事の冒頭に**部局名**を記載

簡潔で分かりやすい**タイトル**を記載

- ・過去の報告記事(ニュース)では「**である調**」を用いる
- ・今後のお知らせ(インフォメーション)では「**ですます調**」を用いる

日付には括弧書きで**曜日**をつける

- ・写真を掲載する場合は、25文字以内で**キャプション**(写真の説明文)をつける。写真は3枚程度まで
- ・原稿とは別に、JPEGなどの形式による元の画像ファイルを別途送付する(プリントの写真は学内便で送付)

句読点は「、」「。」を用いる

時間は**24時間表記**とする

- ・記事は一行25文字の書式で作成する。
- ・文字数は800字を目安とするが、内容によって増減は可とする。
- ・人物名は**フルネーム**で表記すること。

## 提出上の注意

### 1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとして送付すること。

(学内広報担当者の個人アドレスではなく、必ず下記のアドレスに送付してください。)

### 2. 締切日

HPで発行スケジュールを確認すること。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html)

トップページ> 広報・情報公開> 学内広報

### 問い合わせ先・提出先

本部広報グループ広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393(内線 22031)

E-mail: [kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から、必ず**受領メール**をお送りしています(概ね1週間以内)。返信メールが届かない場合は、何らかのトラブルで原稿を受け取れていない可能性がありますので、**その際はお問合せ願います**。

# Contents

## 特集

- 2 What's going on? 「行動シナリオ」拡大版

## NEWS

### 一般ニュース

- 7 本部国際企画グループ、高齢社会総合研究機構「日本・スウェーデン国際会議—ジェロントロジー—」を開催
- 8 本部外部資金戦略グループ 平成21年度科学研究費補助金第1段審査委員表彰を受賞!
- 8 本部学生支援グループ 第56回総長杯争奪水上運動会が開催される
- 9 本部留学生支援グループ 平成21年度第2回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される
- 10 本部学務グループ 平成21年度教育実習・介護等体験懇談会開かれる
- 10 海洋アライアンス 第2回海洋アライアンス・日本財団共同シンポジウム開催
- 11 海洋基礎生物学研究推進センター「海洋基礎生物学研究推進センター発足式」開催される
- 11 地球観測データ統合連携研究機構 (EDITORIA) 第5回統合的な地球観測システムを利用したアジア水循環イニシアティブ国際調整グループ本会合 (GEOSS-AWCI ICG)、開催される
- 12 数物連携宇宙研究機構 米カリフォルニア大学バークレイ校と全学国際学術交流協定を締結
- 13 海洋アライアンス 山口県で出前授業を開催
- 14 本部業務改善グループ 2009年度業務改善総長賞表彰式

### 部局ニュース

- 15 史料編纂所 アフターヌーンセミナー 2009の開催
- 16 生産技術研究所 外国人研究者・留学生との懇談会開催される
- 16 大学院人文社会系研究科・文学部、大学院教育学研究科・教育学部、大学院理学系研究科・理学部 進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催
- 17 大学院教育学研究科・教育学部 第5回公開講座「自らを傷つける子どもたち」開催される
- 17 医科学研究所 International Student Research Forum 2009に参加
- 18 大学院総合文化研究科・教養学部 三鷹国際学生宿舎で自衛消防訓練行われる
- 19 大学院人文社会系研究科・文学部 2008年度ノーベル文学賞受賞作家 ル・クレジオ氏の講演会「フィクションという探求」を開催
- 19 大学院農学生命科学研究科・農学部 動物慰霊祭開催される
- 20 大学院工学系研究科・工学部 航空イノベーション総括寄付講座CAIR 日仏合作グライダー 100年記念講演会式典開催
- 21 医科学研究所 医科学研究所附属病院でクリスマス・コンサート開かれる

### ◆ 表紙写真 ◆

総合研究博物館「理学部動物学教室旧蔵ガラス乾板デジタルアーカイブ」に所収されている『ベンガルトラ絵画写真』。【英名: Bengal tiger 学名: Panthera tigris tigris 製作: W.Kuhnert 材料: ガラス 記載事項: ラベルペン書「Felis Tigris Bengal tiger Haacke's Tierleben.」、ラベル白紙】

- 21 附属図書館、大学院情報学環、社会科学研究所、史料編纂所 総合図書館棟ポーチ外灯復元記念披露及び点灯式
- 22 大学院工学系研究科・工学部 量子科学センター・レーザーアライアンス 合同シンポジウム/第5回 先端量子科学アライアンスセミナーが開催される

### キャンパスニュース

- 24 本部留学生支援グループ 平成21年度外国人学生数—国費外国人留学生数1,087人、私費外国人留学生数1,672人、外国政府派遣留学生数26人、その他の外国人学生(在日外国人学生)数269人—

### コラム

- 28 PCリユースのわ 第3回
- 28 インタープリターズ・バイブルvol.30
- 29 Policy + alt vol.05
- 30 発掘! 総長室総括委員会 第19回
- 31 Crossroad 産学連携本部だより vol.50
- 32 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第47回
- 32 コミュニケーションセンターだより No.64
- 33 ケータイからみた東大 ~東大ナビ通信~
- 33 噴水 医学部本館とロータリーの電飾

### INFORMATION

#### シンポジウム・講演会

- 34 トランスレショナル・リサーチ・イニシアティブ 東京大学G-COE「学融合に基づく医療システムイノベーション」シンポジウム CMSI Annual Symposium 2010
- 35 サステナビリティ学連携研究機構 国際生物多様性年記念 サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) 国際シンポジウム「生物多様性とサステナビリティ—自然と調和した社会をつくる」開催のお知らせ

#### 募集

- 36 本部学生支援グループ 平成21年度第2回「東京大学総長賞」の募集について

#### お知らせ

- 36 退職教員の最終講義
- 38 大学院総合文化研究科・教養学部 「教養学部報」第526 (1月6日)号の発行 —教員による、学生のための学内新聞—
- 38 情報基盤センター 春休み「情報探索ガイダンス」のご案内
- 39 医学部附属病院 「第5回 22世紀医療センターシンポジウム」 医療ニーズと産官学・国民の連携 22世紀に向けた学融合の拠点—挑戦と展望—
- 40 大学院農学生命科学研究科・農学部 技術職員研修会開催のお知らせ

### 事務連絡

- 41 人事異動(教員)

### 淡青評論

- 44 Global standard? Colonial standard?



七徳堂鬼瓦

## Global standard ? Colonial standard ?

現在の大学の起源がヨーロッパ中世にあることは、言うまでもない。当時、高等教育で使用されたことばはもっぱらラテン語だったから、学生はその出身地によらず、どの大学でも学ぶことができた。大学はその語源 *universalis* にふさわしく、地域を超越した存在だったわけである。ローマの異端宣告もソルボンヌ次第、というほど全カトリック世界に権威を誇ったパリ大学はもちろん、後発地方大学であるプラハでも、その学生組織はボヘミア、南ドイツ、ポーランド、北ドイツの4部からなる国際的なものだったという。そういえば、デンマーク王子ハムレットは、ドイツはヴィッテンベルクの学生ということになっていた。

ルネサンス期から近世以降になると、高等教育機関は国民国家と結びつきを強め、俗語による教育を始める。フランスは、神学部から切り離されたコレージュ・ド・フランスやアカデミーを創設し、フランス語教育を通じての国民国家創成を強力に推進してきた。啓蒙時代から19世紀のドイツにおいて、次々に新大学が設立され、ゼミナール、講座制といった研究教育システムが出現するのも、高等教育のドイツ語化と密接な関連があるだろう。

高等教育国語化のプロセスは、日本でも起こった。東京大学の草創期、ごく一部の例外を除けば授業はすべてお雇い外国人によるもので、医科大学ではドイツ語が、他の分科大学では英語が、公用語だった。教員と使用言語の外国依存を脱することが独立国家としての急務と考えた政府は、乏しい予算を割いて留学生を派遣し、邦人教員の速成をはかる。涙ぐましい努力の末、まがりなりにも国語による高等教育が可能となったのは、明治30年代のことであった。その象徴が、帝大英文科講師ラフカディオ・ハーンを解雇し、後任として夏目金之助を採用した一件ではあるまいか。

東京大学の創立から130年を経た平成の日本国は、明治政府の苦心をまるで忘れてしまったかのようである。G30なる国家プロジェクトでは、英語による授業を受ければ卒業できるコースを、各地の大学に作らせるといふ。ろくな金も出さずに、である。国際基準に従う、といえど耳に快いものの、英語をラテン語に置き換えれば、なんのことはない、中世へ逆戻りみたいな話だ（この基準、英語を母語とするいくつかの国家や元植民地がひどく有利なのは、ラテン語の場合とは違うけれど）。世界中どこでも高等教育を英語で行うと想定した場合、かつてのソルボンヌの地位を襲うのはハーバードあたりだろうが、さてわが東京大学は、となると、かのプラハやヴィッテンベルク相当くらいには、誰かが評価してくれるのだろうか。

宮岡洋一（大学院数理科学研究科）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

No. 1395 2010年1月25日  
**東京大学広報委員会**

〒113-8654  
 東京都文京区本郷7丁目3番1号  
 東京大学本部広報グループ  
 TEL : 03-3811-3393  
 e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。